View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

元隣『誹諧小式』—解題と翻刻

野村 亞住[a]
[a]湘北短期大学

はじめに

本書は、山岡元隣（寛永八年〈一六三一〉～寛文十二年〈一六七二〉）が、寛文二年に著した俳諧作法書である。目録によると、「第一 賦物之事」以下「第卅一 六義之事」までの三十一項目と、「追加 書物題号之事」の全三十二項目からなり、『新増犬筑波集』『俳諧御傘』『毛吹草』などさまざまな書物を引用し、例句を挙げて詳細な解説が付されている。

元隣の俳諧活動については、雲英末雄氏や榎坂浩尚氏らによって年譜が作成されている[*1]。これらによって彼の俳諧活動を概観しておこう。元隣の俳諧への関わりは、明暦元年（一六五五、元隣二五歳）頃から始まると推定されている。北村季吟について俳諧・古典注釈を学び、季吟の宗匠独立記念『祇園奉納誹諧連歌合』を後援するなど、同門下の可全とともに季吟を経済的に援助する最も信頼厚い門弟であった。明暦三年から没するまでの十四年間、毎年、季吟歳旦三物に名を連ねており、寛文六年（元隣三六歳の時）に宗匠立机を許された。その間、本書の他に、俳諧千句『身の楽千句』（寛文二年刊）、俳諧の歌仙形式の連句集出版としては嚆矢となる『歌仙ぞろへ』（寛文六年頃）、俳文集『宝蔵』（寛文十一年刊）を出版するなどし、寛文十二年四二歳で没した。没後刊行の俳諧集に『諸国独吟集』（季吟序、寛文十三年刊）などがある。

『誹諧小式』は、元隣が宗匠として立机する四年前、三二歳の時の成立であり、元隣にとって、もっとも早い時期に著された俳書ということになる。以下、その成立・内容等について、いささか考察を加えたい。

一、諸本

底本とする早稲田大学図書館蔵本の書誌は以下の通りである。

題名…外題「誹諧小式」（序題）、内題「小式」（凡例題）、柱題「誹」。
書型…横本（一三・九糎×一九・七糎）、袋綴一冊。
表紙…藍色卍繋ぎ唐花唐草摺出し模様表紙
題簽…左肩（一二・一糎×二・三糎）、単郭（一一・九糎×二・一糎）、題簽後補（墨書「誹諧小式 全」後表紙見返しの書き入れと別筆）。
匡郭…一二・一糎×一九・〇糎
字高…一一・三糎（ただし、六丁表、本文二行目を計測）。
柱刻…「仕やう 序一」～「仕やう 序四」（漢文序～「凡例」裏ノド）、「誹一」～「誹卅二」・「卅三」～「四十」・「誹四十一」～「誹四十三」・（四十四）～「五十五」・「五十六終」[*2]（自序～自跋、各丁裏ノド）
丁数…全六〇丁。（漢文序一丁半、目録一丁半、凡例一丁、自序一丁、本文五三丁、自跋二丁）
行数…本文は毎半葉一四行。漢文序、一二行。
序跋…「岩／寛文二年歳次壬寅春三月下澣／求心子序」（二オ）、元隣自序（五）、「寛文二年初春日述也／洛下六角通／山岡元隣（又号玄水）」自跋（巻末）。

刊記…なし。
旧蔵者…小寺玉晁旧蔵。印記、玉晁(朱文)。小寺姓玉晁文庫(墨印)。

今回底本とした早大本の他に、『誹諧小式』は、天理大学綿屋文庫（題名に『誹諧小式』とするもの・『はいかい仕やう』とするものの二冊）、聖心女子大学図書館、東京大学竹冷文庫（題名『はいかい仕やう』）・同洒竹文庫、国文学研究資料館に所蔵されている。題名を『はいかい仕やう』とする天理綿屋本・竹冷文庫本を含め、全ての伝本が刊記を欠き、題簽の異同はあるものの、本文・項目において異同がなく、傷の箇所や文字の欠けの具合から同板であることが確認できる。天理綿屋文庫本が、唯一原装で原題簽を残すものである。単郭の刷題簽で、外題に「はいかい仕やう」とあるが、題簽上下部分の破損が著しい。東大竹冷本は表紙が改装であるものの、題簽部分のみ原題簽が残されており、それには「はいかい仕やう 後」とある。この原題簽は天理綿屋本と同一であると認められ、天理綿屋本の題簽もおそらくこの形であっただろうことが想像できる。改装であるものの、竹冷本が伝本の中でもっとも美本で、早大本・天理綿屋本と字高他、寸法がほぼ同寸であって、刷りの良さから、かなり早い時期の刷りであると考えられる。国文学資料館本、洒竹文庫本は、この三者に比べて刷りが良くない。資料館本は、原装ではあるが題簽を欠くもので、洒竹本は改装で題簽を欠き、前表紙左肩に「誹諧小式序」と墨書がある。早大本を含め、これらの諸本が、藍色地の卍繋ぎ唐花唐草摺出模様表紙で、題簽は竹冷文庫本同様、「はいかい仕やう 後」と題されて出版されていたと推定される。

ここで興味深いのは、聖心女子大学武島文庫本（紫香文庫旧蔵）である。聖心女子大本は、一見原装と見えるが早大・東大・天理・資料館本所蔵の全ての伝本に対して、表紙の色と外題が異なる。丹色地の卍繋ぎ唐花唐草模様摺出表紙で「身の楽千句 前」という原題簽を持ち、その題簽には「寛文二年梓行」と朱書がある。だが、早大本と寸法も変わらず、漢文序以下、目録・自序跋・本文、柱刻など細部にわたるまで異同はなく、その他の版本同様、早大本はじめ他の伝本と同板であることが確認できる。

写本として、天理大学綿屋文庫二冊（石田文庫旧蔵本・紫影文庫旧蔵本）、早稲田大学中村俊定文庫、学習院女子大学所蔵本などがあるわけだが、天理本写本の内一冊（石田文庫旧蔵）は表紙以下を天理綿屋文庫本（版本）によって透写したもの（新たに表紙を付して「誹諧小式」と題簽が付けられている）。また、早大中村俊定本は、「元題簽ハ「はいかい仕やう」なり、身楽千句と合して二部をなすものならん」と筆写者識語があり、奥書に「松宇文庫本ニヨル」と注記されている[3]。これら、本書の写本は、全て早大本と同板の写しであると認められる。したがって、現存する全ての版本・写本に関して、本書は異版や改版が見られず、同一板木によるものであることが確認できる。

ところで、本書の成立年は、漢文序によって寛文二年三月であることがわかるわけだが、現存する諸本全てにおいて、最終丁は「終」とのみ表記され刊記が見られないため、明確な刊行時期を特定できない。と同時に、刊記を有した初刷があったのではないかという想像ができるわけだ。こうした出版時期に関しては、俊定文庫写本に、中村氏の鉛筆書きで「延宝四・五年頃の板カ」と年記に関する推察が見られるものと、聖心女子大本の「寛文二年梓行」と朱書されるばかりである。だが、聖心女子大本の表紙は、色・模様ともに現存する『身の楽千句』伝本と同一のもので、あるいは『身の楽千句』を「後」編、『誹諧小式』を「前」編として「身の楽千句」と題されて出版された可能性にも留意しなければならない。だとすると、本書には「はいかい仕やう 後」（＝小式）、「身の楽千句 前」（＝小式）

という二形態が存在したことになるわけだが、そうした刊行時期や、伝本の形態、聖心女子大本の位置づけも含め、本書は『身の楽千句』との関係を抜きには考えられないだろう。ちなみに、寛文十年の「増補書籍目録」、同十一年山田市郎兵衛刊の「増補書籍目録」に、元隣著「仕様」として出版が確認できるので、少なくとも寛文十年以前の刊であることは疑いない。なお、こうした書籍目録類の記述や原題簽、漢文序ノド丁の題に従い、本書は刊行当時、正式書名「はいかい仕やう」として出版されたものであると考えられるが、本稿では『俳文学大辞典』など通行の呼称に従って本書書名を「誹諧小式」として論じることとした。

二、『身の楽千句』との関わり

本書の執筆意図については、跋文に「やつがれ千の句を連ねしも、今見るところ〳〵心よろしからざる事のみ有。かつは自らの不忘の備へに書きならべ侍し（中略）我が誤の悔しきにこるゝ事のうきを知らば、いかんぞ。人々に知らして、後の車の戒めとせざらん」と述べられている[4]。ここでいう「やつがれ千の句」というのは自身が同年に成した『身の楽千句』のことである。たとえば、本書第二十三項「つゝどまりの事」には、「やつがれも千句のうちに」として「（執ねき中はやあら冷じ）両夫は見じと尼（アマ）に成つゝ」と引用がなされるが、これは『身の楽千句』第十百韻初裏十一句目に相当する。また、第十二項「大まはしの発句之事」で引用された元隣の句「花咲かぬ身は泣くばかり犬桜」は、『身の楽千句』第三百韻の発句である。このように、本書において要語の解説に『身の楽千句』を用いていることは、元隣の跋文に見える「千句」がこの『身の楽千句』を指すことを意味していると見て間違いない。すなわち、本書は跋文にある通り、この『身の楽千句』における欠点を悔いて、これまでの俳諧の全知識を整理し俳諧初心者に向けて記したものということになろうか。本書と『身の楽千句』との関わりは、両書の序跋によって述べられていることから、すでに指摘されるところではあるが、出版年次や順序などについての言及がいまだ不明瞭である。今一度、両書の記述をもとにその相互関係を整理しておきたい。

『身の楽千句』は、本書と同年、寛文二年一月の自序と同年四月の山中正淑による漢文序を持つものである。本書の序跋の年記が「寛文二年初春」・及び「寛文二年春三月」であることを考えると、『身の楽千句』の成立の後に本書が著され、同年一月に自跋、三月に求心子によって漢文序が付された。その後、『身の楽千句』の漢文序が四月に付されたことになる。つまり、先に成立したはずの『身の楽千句』に対して、本書の完成後に序文が付されて刊行されたことになるわけである。そして、その『身の楽千句』正淑の序には、「作（サク）二為（イシテ）小一式（シキ）一一篇（ヘンヲ）一而、以附（フス）二于後（シリヘニ）一。」とあって、本書『誹諧小式』を後編とし、合わせて二冊で一書として出版されたことが記されている[5]。『身の楽千句』の伝本は、原題簽が残る天理大学綿屋文庫（「身の楽千句」）、東京大学洒竹文庫（「身の楽千句 後」）、後補題簽の同竹冷文庫（「身楽十百韻」）、柿衞文庫（「身楽十百韻」）となっていて、先にもふれたが、聖心女子大本『誹諧小式』の表紙と同じく、丹色の卍繋ぎ唐花唐草の摺出表紙を持つ。その形態は、本書とほぼ同寸で題簽の書体やその形式が同一であること、漢文序の柱題が「身序一」のようになっていること、また、本文を除いた箇所の匡郭が単郭で、寸法・体裁が酷似していることなど、本書とセットであったことが両書体裁面からも窺われるわけだが、両書の表紙が模様は同じであるものの、地色が藍色と丹色というように異なっていることが気にかかる。

前引の『身の楽千句』正淑の序によれば、『誹諧小式』を『身の楽千句』の後編としたと見えることから、聖心女子大本『誹諧小式』の題簽とは「前」「後」に矛盾が生じる。とすると、聖心女子大本の題簽は、『誹諧小式』に付されたものではないと考えられる。実は、洒竹文庫本『身の楽千句』と聖心女子大本『誹諧小式』とは、ともに紫香文庫旧蔵であり、もと一組となっていたと覚しい。そのことをふまえると、洒竹本『身の楽千句』の書題簽（「身の楽千句 後」）は、聖心女子大本『誹諧小式』の刷題簽（「身の楽千句 前」）につがえて旧蔵者によって後補されたものであって、旧蔵者に蔵された時点ですでに、その題簽を欠いた状態であったのだろう。そしてまた、旧蔵者の手に入る以前に聖心女子大本の表紙が改装され、『身の楽千句』の表紙を『誹諧小式』に付け替えたものであったと見れば、この「前」「後」の矛盾は解決する[6]。やはりこの両書は、『身の楽千句』序文から千句を前編、小式を後編としたものであろう。しかしながら、現存する両書の形態は、紺表紙と丹表紙であり、かつ無刊記である。つまり、初刷りでない可能性が高い。このことを考えれば、おそらく刊行当時は、刊記のついた丹表紙の『誹諧小式』が存在し、丹表紙の二冊組であったのであろう。

『身の楽千句』の内容は、第六百韻までが「題春秋」として、第一雑春「身の楽や花見る時とひとねいり」・第二雑秋「さびしさはいやが上也宿の秋」・第三雑春「花さかぬ身はなくばかり犬ざくら」・第四雑秋「名月に花より後のうさもなし」・第五雑春「もゝの酒よけせ千（チヾ）のうさ十分一」・第六雑秋「いはふかな虫同前（ムシドウゼン）も秋津国（アキツクニ）」というように、雑春・雑秋の独吟百韻を交互に詠作したもの、第七はその追加独吟百韻（冬発句）「空もおしゝ心一盃（ハイ）十二月」、以下、一重・生順・元流との四吟百韻（夏発句）「おのが非（ヒ）をおもへば昼（ヒル）の蛍かな／元隣」、重以との両吟百韻（秋発句）「なめし我此体（ティ）ならば菊の露／元隣」、美濃国円明院との両吟百韻「霜月ついたちみのゝ国円明之院主と此所にいたりて／けふくるや一やう生（ジヤウ）の有馬（アリマ）の湯（ユ）／元隣」を加えたもので、千句の形式には欠け、内題に「身楽十百韻」（巻首）とあるように、十百韻と見るべきものである。しかしながら、前引の「つゝどまりの事」に見える例句の引用では、「やつがれも千句のうちに」として「両夫は見じと尼（アマ）に成つゝ」の句が引かれており、こうした記述からは、元隣がこの十百韻を「千句」として考え、「千句」という題を付して刊行することが念頭にあったことが窺い知れる。またさらに、『誹諧小式』の跋文に「此小式の旨を以て、予が数の句を詰り出んは、いかゞはせん。曰、笑はざらんにはしかじ」という文言からは、本書がこの『身の楽千句』と同時に刊行されることが前提になっていることがわかる。つまり、こうした跋文の記述と、本書の跋が『身の楽千句』の序よりも先に成立していること、及び、「作（サク）ー為（イシテ）小ー式（シキ）一ー篇（ヘンヲ）一而、以附（フス）二于後（シリヘニ）一。」という『身の楽千句』序文の記述を思えば、本書と『身の楽千句』とが同時に刊行され、その刊行時期は、『身の楽千句』の漢文序に見るように、寛文二年の四月以後であったということが推定できる。

だが、そうした観点で諸本を見ても、「はいかい仕やう」・「身の楽千句」とそれぞれ別題簽であるために、実際にセットとして出版されたかどうか断定する要素に欠ける。そこで、書籍目録類を参照すると以下のようなことがわかる。貞門期の俳書目録と目される『誹諧渡奉公』（竹馬子大鹿汲浅著、延宝四年奥）に「身楽千句／二冊内一札仕様／寛文二年正月／元隣述之」と記されていることをはじめ、延宝三年の「新増書籍目録」に「誹諧仕様／内壱冊身楽千句／元隣」、天和元年山田喜兵衛刊の「書籍目録大全」に「誹諧仕様／内一冊身楽千句／元隣」と見え、延宝頃には『身楽千句』が本書と二冊組であったことが記されているのである[7]。前述した寛文十年・十一年

の書籍目録や元禄五年刊の「廣益書籍目録」などには[8]、『身の楽千句』と本書が横並びに配されて掲載されていることなど考え合わせても、かたがた、本書を二冊組の書物と見て過たないだろう。そもそも、「はいかい仕やう」という題は、俳諧の作法といった意を表す一般名詞であった。たとえば、本の大意を付した書籍目録類には、『誹諧埋木』や『毛吹草』『世話焼草』『番匠童』『をだまき』などの注として「仕様」という語が見えるのである。つまり、『誹諧小式』に付された題簽「はいかい仕やう」とは、『身の楽千句』の「仕様」部（作法編）、ということにほかならない。こうした題の観点から見ても、『誹諧小式』が単独の一書ではなく、『身の楽千句』とのセットであったことがわかるのである。

したがって、本書『誹諧小式』と『身の楽千句』との関係を整理すると以下のようになる。

・刊行は、寛文二年四月以降、寛文十年以前。本書と千句とは二冊一組として出版され、本書はその作法編として付されたものであったこと。

・その際の題簽は「身の楽千句 前」（＝千句）「はいかい仕やう 後」（＝小式）であったこと。

・現存する伝本を整理すると、次のように推測される。

丹表紙　　紺表紙

○身の楽千句 ――――――― ×身の楽千句 ―――――→

×はいかい仕やう 刊記有…○はいかい仕やう 刊記無 ―――→ 現在

以上、推論を重ねたが、本書の書誌事項に関しては、記述内容と現存する諸本、書籍目録類に見える本書の出版情報を総合して考えて、右に示したものが矛盾なく妥当であると考えられる[9]。

三、内容

本書目録に挙げられる各項目は、句作の際の心得から、式目、詠句の注意点にいたるまで、詳細な解説がなされている。序文にも見えるように「俳諧」を「和歌の一体」として捉え、俳諧の用語や作法の説明において和歌の引用が処々に配されているという特徴を持つ。同時代の俳諧作法書類に比べ、その解説が詳細で明確であるのは、本書序跋に見えるように、自身の千句を成して後の実感が反映されているためである。貞門俳諧では、こうした俳諧作法書類が本書以前にも、貞徳の『俳諧御傘』（慶安四年刊）など多数刊行されている。俳諧運座の手引きとして俳諧式目書・いろは順の用語解説・季寄せからなる『はなひ草』（立圃編、寛永十三年）、『連歌新式』にならい貞徳の式目歌を批判した俳論書『誹諧初学抄』（徳元、寛永十八年刊）、貞徳の秘伝書として歌道との関連、連歌式目の俳諧への適用方法・会席の心得などを記した『天水抄』（貞徳、寛永二十一年成）、『天水抄』の中でも「猶、くるるとて一巻有。門弟是にて万事沙汰すべし。他人に知らすべからず」と秘伝書として取り上げられている西武の『久流留』（寛永十三年成、慶安三年刊）、例句とその解説から成る季寄せ『山の井』（季吟、正保四年刊）、式目作法を記した辞書的側面と季寄せ的側面を併せ持つ『毛吹草』（重頼編、正保二年刊）、それに対しての反論書として、本書でも「非言の書」として批判された『郡山』（正式、正保三年刊）・『氷室守』（貞室、正保三年刊）、同じく「非言の書」として挙げられた『馬鹿集』（重頼か、明暦二年刊）などがある。『俳諧御傘』がそうであるように、連歌式目書『無言抄』や『いろは新式』にならい、いろは順で用語（式目作法要語・季語）を配列し、解説を付したものなど、用語引きを目的に羅列されたものが多い中、本書では「第廿九　前句に持れ前句

を借句之事」などというように、具体的に付けの用法の見出しを項目立てて明示し、その解説がなされる、というような実作を想定した俳諧作法の手引き書となっていることが独自である。本書は貞徳の没後の式目の乱れを鑑み、初心者のための作法書であると述べられているが、こうした各項目からここに想定される読者は自ずから、俳諧を始める全くの初心者ではなく、貞門（季吟門）の実作を行っているものと考えられ、自身の俳諧の力を磨くための手引きとして読まれることを目的としたものだったのだろう。そのために、本書で取り上げられた項目は、「発句」に関するもの、「連句」に関するもの、その他、概論・てにをは等、と大きく三分類できる。以下、この分類に大別して本書に記された内容を紹介する。

（1）「発句」に関する記述

本書における「発句」に関する記述は、本歌取など（第二）、発句の本意（第三）、「無心所着」（第四）、歌の制の詞（第五）聞発句・古語（第六）、詞を残す発句（第七）、切字（第八）「を」廻しの発句（第九）三段切発句（第十）、はね字・とめ発句（第十一）、大廻しの発句（第十二）の一一項目にのぼる。

発句に関する記述は、俳諧からの例句、連歌例、歌例を用いながら、そこに解説を付す形式を持つ。発句に関してこれほどの項目を章立てて解説されるのは、他には類をみない。たとえば、本歌取に関して述べられた箇所を見ると、次のように記されている。

発句の仕立やうは、さまぐ〜の師傳（シデン）・しなぐ〜の工夫（クフウ）もある事なれば、いづれをさして是ぞと云出んも、風をつなぐ類なるべけれども、本歌をとる事、和歌・連歌よりも有法なれば、いさゝか記（シル）し侍る。恋（コヒ）・雑（ザウ）の歌を取ては四季の歌を読（ヨミ）、四季の歌を取ては恋（コヒ）・雑（ザウ）の歌を読事、つねの事也。月の歌を取て月の歌を詠（エイ）じ、花の歌を取て花を読事無念也、と古今の諚（ヲキテ）なり。はいかいも此心なり。

契りけん心ぞつらき織女（タナバタ）の年にひとたび逢はあふかは

といふを取て、

ちぎりけん心ぞつらき餅（モチ）づくし　則常（ノリツネ）（第二「発句之事」）

発句の仕立て方に関しては、流派の教えや工夫など様々あるが、本歌取りに関しては和歌・連歌からとられてきた伝統手法である、と述べ、その方法を解説している。こうした記述からは、元隣の叙述の仕方や、論立ての手順が、伝統的な手法を説明することによって成立し、そこに論拠を見いだしている、ということを示しているようで興味深い。立項されたものの多くは、このように例句と解説とで構成されているわけだが、この「発句」に関する記述の内、第八の「切字」に関してのみ、用語を列挙し、その説明に徹している。それとは対照的に、用例だけを提示した項目は、第十から十二で取り上げられた、切字と発句のバリエーションを扱ったものである。

（2）「連句」に関する記述

連句に関しては、脇（第十三）、第三（第十四）、四句目（第十五）、五句目（第十六）、面八句・九句目（第十七）、月花に関して（第十八）、呼出花・引上花（第十九）、句数・去嫌（第二十）、「糸遊」・「霞」・「長閑」の句（第二十一）、春秋の両字を添えて季を持つ句（第二十二）、親句・疎句（第二十七）、故事（第二十七）、篇序題曲流・用付・後付（第二十八）、前句に持たれ前句を借りる句（第二十九）、異形通体・四手付（第三十）、の句の仕立方の五項目、定座・式目関係の三項目、その他、付け様や運座に関する注記を示した七項目の計十五項目が相当する。

連句に関する記述では、総じて連句の実作を反映した記述が注目される。たとえば、月花の定座に関する意識が、第十八項、十九項

で記されているが、その中でも「春は三句せずしては、かなはぬ事なれば、六・七・八句と来て、九句目より十二句目まで四句なれば、定座の花の句、五句去の春、一句近きゆへ也」「十句目より後は、低き植物もせぬ事也」「裏にても五句目めまでには、春をも仕候。其故は三句続けても、定座の花と五句の隔て有故也」（「呼出花・引上花之事」）などと、定座への意識を具体的に運座に当てはめて解説されている。こうした第十三項から第十七項にかけて記された句の仕立方の記述は、後の俳諧式目作法書として評価の高い『俳諧無言抄』などに先行する示し方として注目できる。これは、連歌論からの引用が多いことに起因していよう。先に示した「花の定座」への意識は、『俳諧無言抄』においても「連歌には、四春八木と覚て、四句めに春を仕出さず」「春の季出たらば、その春のうちにて花を引上」（「裏」の項）るとあって、同様の内容が記されていることが見て取れる。本書における「連句」に関する記述は、概説的な説明や用語の解説にとどまらず、こうした運座における意識が、句去・去嫌という別項に立てられた季の式目との兼ね合いで説明されることによって、より明快に規定されていると言える。後に、『歌仙ぞろへ』の巻末に月花の出所を明確に定義していることの素地がここにあるといえよう。

本書に先行して刊行されている貞門期の作法書類に関して、大概については先に記したが、貞門の作法書が季寄せ的側面を充実しつつあった。その中にあって、本書で季の詞に関して述べられているのは二項しかない。季に関する記述がこれほど少ないことは注目に値すると言えよう。その本書における季に関する二項目とは、「糸遊・霞・長閑」の項（第二十一）「春秋の両字添季持句」の項（第二十二）で、両者ともに、連句の中での季に関する言及ということになる。「糸遊・霞・長閑」では、春の季の詞でありながら、慣用的に使われたり、読み替えられたりできる、という語義の多面性を述べ、「春秋の両字添季持句」では逆に、投げ込み的に用いられた季節に関して言及している。連句の運座にあって、季の式目と関係する春・秋の句は、句数の規定の関係上、夏・冬よりも多数回詠むことを要求される。そうした際に、一句の句意とは無関係に季節を合わせるためだけに「春」ないし「秋」という語が詠み込まれた句が横行していることを危惧しての指摘がなされている。ここには、実作の側面からの叙述と式目遵守の意識の融合、加えて一句の句意を重視する元隣の意識が読み取れる。いかに連句であっても、そうしたバランスの取れた句作を志向する姿勢が窺われるのである。

このように、本書内での季に関する記述の内容が、どの季節の詞で、どういった本意を持つのかを解説するような季寄せ的側面ではなく、実際に連句の運座にあって、どのように次への展開を考えて季節を配していくのかなどというような運用の方法など、式目と関わる問題からの説明がなされていたということがわかるわけだ。すなわち、この両項目が月花の定座、句数・去嫌に関する記述の後に配されていることを考え合わせると、裏の月の句と花の定座との兼ね合いによって季移りとなる付合に関する記述と理解でき、こうした転じの重要性を意識した書かれ方となっていたのである。俳諧作法書というが、季語としては、連歌論に見る運用の方法を踏襲しながら説明されていることが特徴的であると言えよう。

（3）その他

「てにをは」に関しては、「つゝどまり」（第二十三）、「にとまり」・「にてどまり」（第二十四）「てにをは」（第二十五）の四項目あり、切字に関する記述と同じく、用例を用いず用語の解説に終始している。逆に、用例を多用して、解説が簡略なのが、「六義」（第三十一）に

関する記述である。『古今』の「序」や『八雲御抄』からの影響が見える。また、「賦物」（第一）に関する記述が、巻頭に配せられ、「たとへば、発句に山と云字あるときは、賦何路連歌と賦す也。此心は何と云字が謎のやうなる心にして、即山路といふ義也…誹諧も此心也。第三までに通はぬ字を賦する也。…追善之連歌・経文之連歌・夢想之連歌なとかける事有。され共、当流には賦物をとらず、たゞ誹諧之連歌と五字にて端書する也」（第一「賦物之事」）などというように、細かく説明がなされている。とりわけ、傍線を付した「当流には」という言い方が印象的だが、ここには、「連歌」と「俳諧」との差異と、「貞門」という流派への意識のあらわれを見てとることができよう。これは、本書の言ではないのだが、『身の楽千句』の自序において元隣が「俳諧は戯言にして、たやすく其様いやしきやうに、おのれとかき侍るは何事ぞや。これゆへ、初心の俳諧し、連歌する人に向ひては誹諧するといふ事を隠すやうにせり。かの書つくる人、礼儀の本を知らざる故なるべし。昔より我身をへりくだる例はきけど、其修する道を無下に云くだすためしはなし。やつがれおもふに、和歌は黄金、連歌は箔、誹諧は泥、みな同体異名のたから也」と記すように、元隣の「俳諧」への意識が、和歌の流れにありながらも、和歌・連歌・俳諧という格の序列があるのではなく、三者三様にそれぞれ見るべきところの多いものだということが窺い知れるのである。こうした元隣の記述は、当時の貞門俳諧の流れと一致する。中村氏によれば、「和歌の一体」として俳諧を位置づけ、連歌との差異化を図りながらもその地位を連歌と対等の地位にまで押し上げようとしたのが、本書でもたびたび引用された重頼・立圃らの考えであった[*10]。その実態として、和歌的技巧や連歌論を踏襲しつつ、一句の句意を重視し、「俳言」や文体によって俳諧化する「心の俳諧」を目指すことが貞門であり、とりわけ季吟は古典からの差異によっておかしみを得るという方法でその地位を確立しようとしたのである。その意味では後に、『守武千句』などに見る卑近な素材や「俗態」・「俗言」を用いるというような現在性を持つ言葉によって俳諧化を図る宗因流（談林）の流行を懸念して秘伝書であった『俳諧埋木』の公刊に至った季吟の考えとも合致している。さらに、「非言の書」としてたびたび正式や正章など貞室門の書物を批判の対象としている点は、貞室門と季吟門との差異化を意図した、季吟に添った本書の叙述態度として注目できる。つまり、この「賦物之事」が本書冒頭の項目で取り上げられたのは、和歌・連歌に流れを汲むことと、連歌や宗因流、ひいては貞室門との違いを明確に示そうとした意図によるものであったと考えられるのだ。そして、巻末には「書物題号之事」として「追加」の項目がある。『源氏物語』などを取り上げながら、どこに着眼して題を採用するのかという「作意」に関する考えを記している。題に関する手法がこれほど詳細に述べられているのは、他にはなく、本書の特徴であるのは言うまでもないが、「書物題号之事」で述べられた内容は、古典知識の梗概的性質をも有していることが注目される。古典や漢籍におけるエッセンスを「題」という観点から解説し、読者に対して古典的知識を付与するよう構成されているのである。

こうして見ると、『誹諧小式』がいかに、貞門の他の作法書類にみえない独自の視点で構成されているかがわかる。発句では、和歌論・連歌論を利用しながら、例句の解釈を述べることで各項目を説明し、連句ではそれを他の式目や運座上の意識をも加味して解説、「てにをは」は、その使分けを記し、連歌・和歌に通ずる概念については俳諧の良い例・悪い例双方をふまえることで、それを顕在化させるというように、理解を促すのに効果的な方法が選択されて叙述されていたのであった。

おわりに

こうして見てくると、本書は、体系的に整備された俳諧式目作法書としては、貞門俳諧において嚆矢というべきものである。とともに、当時の連句における式目運用の実態を垣間見ることができるものとしても重要であろう。こうした点に鑑みて、ここに翻刻を試みる次第である。なお、本書の文学史的位置づけについては、別稿の用意がある。

注

（1）雲英末雄編『貞門談林諸家句集』（昭46年、笠間書院）、榎坂浩尚著『北村季吟論考』（平8年、親典社）ほか。

（2）ただし、柱刻が折込みの内側に位置しているため、確認できる箇所とできない箇所があるため、推定である。

（3）松宇文庫本は現存しないため、中村氏写本が唯一のその形状を残す伝本である。

（4）以下、引用に際しては、適宜、漢字・仮名を当て変え、清濁・句読点等を補って記した。

（5）元隣の出版物全般に関してはすでに朝倉治彦氏（古典文庫二一一『小さかつき』「解説―元隣の作品」、『仮名草子集成　第二十八巻』「解題」等）によって書誌が示され、こうした指摘もなされている。そのため、本稿では『誹諧小式』と関連する箇所のみの紹介にとどめておきたい。

（6）聖心女子大本は明治三七年に武島文庫となっており、紫香文庫、すなわち大久保紫香（一八六四～一九二六）のもとにあったのはそれ以前と考えられる。とすれば、聖心女子大本は、明治の初期にはすでに現存する形態となっていたのであり、紫香が原装と誤るほど、出版後のかなり早い段階で表紙が取り違えられていたと推測できる。

（7）ここに、中村氏が自身の写した『誹諧小式』の刊行時期を延宝四～五年頃か、と推定するに至った所以が窺い知れる。

（8）元禄五年刊の書籍目録には、「二／身の楽千句」「一／はいかい仕様」とあって、「はいかい仕様」が一冊、それとは別に「身の楽千句」が二冊組であるかのように書かれている。聖心女子大本の題簽に従うならば、ここに挙げられた『身の楽千句』は前後編の二冊組で、聖心女子大本がその形を残すものであると考えることができる。そうした視点で、書籍目録類の記述を見直してみると、『渡奉公』では『身の楽千句』が二冊組で、その内の一冊の内容が「はいかい仕やう」であると見ることもできる。そうなると、「はいかい仕やう後」と題された『誹諧小式』と「身の楽千句 前」と題された『誹諧小式』と二種類が存在したことになり、こうした可能性がないとは言い切れない。しかし、寛文年間の書籍目録の記述では、小式と千句とが別々に記されていることから、少なくとも、寛文年間には、「身の楽千句 前」「はいかい仕やう 後」の前後編をなす一書であったと考えられる。

（9）雲英末雄氏は、「丹表紙の俳書」（大阪俳文学研究会会報第32号、平10年10月）の中で、丹表紙を持つ俳書が存在したのは明暦・万治辺りが下限であろうと推定し、「寛文期までは下らぬと思うがいかがなものであろうか」と問題提起をしている。とするならば、私の推定した『身の楽千句』・『誹諧小式』の初刷は、もっとも下限のもので、稀有な例ということになる。が、なお調査を要するものであるため、稿を改めて論ずるべく今は課題としたい。

（10）中村俊定「貞門俳諧史」（『俳句講座1 俳諧史』明治書院）

付記　今回、書誌調査に際し資料閲覧の機会を与えてくださった天理大学附属天理図書館をはじめ、東京大学総合図書館・聖心女子大学図書館・国文学研究資料館の各機関および翻刻の許可を賜りました早稲田大学図書館に心より感謝申し上げます。また、深沢了子氏には、格別のご配慮を賜った。記して感謝申し上げます。

『誹諧小式』翻刻・索引

〈凡例〉

・翻刻にあたり、概ね以下の要領に従った。
・原則として旧字は通行の字体に改め、「コト」・「ドモ」などの合字は開いて記した。
・異体字に関しては残したものもある。
・濁点・ルビ（カタカナ）原文のまま。
・レ点・一二点も原文通り。
・句読点は適宜補って記した。但し、原文ままの句読点には「。」と傍点を振って区別してある。
・丁移りは、（例）本文…」（一オ）と示した。
・索引に際しては、本書本文中にある人名・引用書物等を対象とし、表音式五十音順で採用した要語索引と、引用歌・引用句を対象とし、五十音順に採用した引用歌句索引からなるものとする。
・索引内の表記は清濁、漢字仮名に関しては原文のまま。ただし、ルビは省いてある。
・なお、索引における書名に関しては、本文内の表記に揺れがあるため、漢字を当て変えたものがある。
・索引の頁番号には、算用数字を用いた。

【翻刻】

誹諧小式序

誹諧者本邦之習俗而、其来尚矣。故上自名郷鉅公下至士庶走卒諷之吟之、以攄其懐。可謂盛矣。想夫斯道似軽而非軽。似戯言而非戯言矣。至其淵源者、理義精密而、最出於高妙。雖然世人不知其規格。信口乱道而失之平易。可勝嘆哉。粤山岡元隣者、斯道之師範而一世之偉人也。」（一オ）其平日述作雋永無窮。因茲播揚芳誉於遐邇矣。頃編纂古今之奥蹟、名曰誹諧小式。其意欲啓迪後輩。以予為莫逆之友示之、索其序。披巻閲之、言近而指遠評緻而理明。実俳諧之筌蹄論之模楷也。於乎、人能弘道者、豈謂隣耶。矧又以六義、箋解斯道。是補前人所未備。其功不亦大乎。可嘉可尚矣。於是乎書。」（一ウ）

寛文二年歳次壬寅春三月下澣　　求心子序」（二オ）

目　録

第一　賦物之事
第二　発句之事　本歌本語取用様
第三　発句本意之事
第四　無心所着之事
第五　歌之制之詞之事　はいかいも

第六　聞発句之事　并古語
第七　詞を残す発句之事
第八　切字之事
第九　をまはしの発句之事
第十　三段切発句之事
第十一　はね字とめ発句之事
第十二　大廻之発句之事
第十三　脇之句之事
第十四　第三之事
第十五　四句目之事
第十六　五句目之事
第十七　面八句之事　同九句目
第十八　月花之句之事
第十九　呼出花・引上花之事
第二十　句数之事　并去嫌
第廿一　糸遊・霞・長閑と云句之事
第廿二　春秋之両字添季持句之事
第廿三　つゝとまりの事
第廿四　にとまりの事　并にてとまり
第廿五　てにをはの事
第廿六　故事用やうの事
第廿七　親句疎句之事
第廿八　篇序題曲流之事　并用付・後付
第廿九　前句に持れ前句を借句之事
第三十　異形通体　并四手付之事
第三十一　六義之事
追加　書物題号之事

」（二ウ）

小式凡例

操-摭所近耳目之句、以加評品者、蓋欲使人易暁其意也。

解以俚語者、為初学設記誦之便耳。

往々引用愚句。是似無類例。雖然、若人来問之、則再為開未其余蘊也。非敢自以為好矣。

」（三オ）

摘紅梅千句所載貞徳翁之句、為批為判者、世人以翁之句知為模範而、偶雖有鄙浅之句、不及参考之、」（四オ）又従而師之。故愚録以救流俗因襲之弊。若援余子之述作、論弁筆削、則恐為其人之瑕瑾也。於翁則何減其徳輝哉。

嗜誹諧之徒、頃倣例而、編輯発句、成一書、行于世。有可者、有不可者。後学択善者而従之。家伝耳提等秘蘊不略匿者、欲与衆共之。

終

」（四ウ）

誹諧は和歌の一体にて、其歌は『古今集』に起り、はいかいの連歌は宗祇・宗長の時より連歌の追加などに有しといへど、猶、百匂・千句と首尾せることは、山崎の宗鑑、勢州の守武の時に初り、貞徳の世にぞ盛には成て、花の朝、月の夕にも此会を催しけるとなん。猶、其門弟立圃・重頼・西武・正章・季吟等、此道の先輩也。貞徳没し給ひてこのかた、心々に成別れ、宗匠として集あまざるもなく、点者として人之事。もどき云出ぬもまれなりき。有が中にも非言の

書は」（五オ）正式の『郡山』、正章の『ひむろもり』に初り『馬鹿集』に甚し。いかんぞ、才高ふして徳ひくき。やつかれ、今初心の為に句の抑揚褒貶一品二品云出るも、全他の悪きをいひ、をのれが善にほこらんとにはあらず。其故は余人の句の上を以て難じ出ず。やつかれ今一両句おもはしからざるを作出、其我句を批判し侍る也。若人の句に似たるもあらば、等類也と見のがし給ふべし。これ我心なり。」（五ウ）

○第一　賦物之事

連歌には、「山」「船」「人」「木」「路」やらんを五ケといふ也。其外、「唐」「神」「垣」「嵐」「袋」なといひて、千変万化の字を賦するを小賦物と云也。たとへば、発句に「山」と云字あるときは、「賦何路連歌」と賦す也。此心は何と云字が謎のやうなる心にして、即「山路」といふ義也。此何といふ文字上にあるを、上賦と云。又、発句に「嵐」といふ字ある時は、「山何」と賦す。「山嵐」といふ心也。此何といふ文字下にあるを下賦といふ也。猶、宗伊なと定めをかれたる『賦物集』と云（六オ）一巻有。また、「二字反音」トハ、発句に「花」といふ字ある時は「縄」といふ心也。「夏」といふ字ある時は「綱」といふ義也。

「一字露見」「香」は「蚊」なり。

「三字中略」「菖蒲」は「雨」といふ心也。

「三字上下略」「五字中三字略」なとも此心なるへし。百匂連歌には、大かたなき事也。千句などにまゝ見え侍る。又、発句に「嵐」といふ字と「道」と云字あるには、「山」といふ字は賦さぬ也。「山嵐」と云やらん。「山路」といふや覧。ふたかたに通て、知がたきゆへなり。

誹諧も此心也。第三までに通はぬ」（六ウ）字を賦する也。たれも知たる事ながら、初学の為に委しるし侍る。大かた此心持也。又、「追善之連歌」「経文之連歌」「夢想之連歌」なとかける事有。され共、当流には賦物をとらず、たゝ「誹諧之連歌」と五字にてはし書する也。

○第二　発句之事　本歌本語取用やう

発句の仕立やうはさま〴〵の師伝しな〴〵の工夫もある事なれば、いづれをさして是ぞと云出んも風をつなく類なるべけれども、本歌をとる事、和歌・連歌よりも有法なれば、いさゝか記し侍る。」（七オ）恋・雑の歌を取ては四季の歌を読、四季の歌を取ては恋・雑の歌を読事、つねの事也。月の歌を取て月の歌を詠し、花の歌を取て花を読事、無念也と古今の詮なり。はいかいも此心なり。

契りけん心ぞつらき織女の年にひとたひ逢はあふかは

といふを取て、

ちきりけん心ぞつらき餅つくし　　則常

心は明也。

思へども人めづゝみの高けれは川と見つゝもえこそ渡らね

と云を取て近代の歌に、」（七ウ）

五月雨のふるの中道しりぬれは川と見つゝも猶渡りける

これは、恋の歌を取て季の歌に読なして、其心も新聞ゆる也。又、上の句に読たる詞を腰へやり、下の句になし、又、下の句を上の句に成して読も不苦。又、其歌とあらはしてとるも、ひとつの法也。たゞ、其歌をとれりとしらせずして取を、絹を盗て染て着たる心也、と先達深くにくみ侍し。

本歌本語を用て心を添有。

をみなへしたとはゞあはの内侍哉　　季吟

これは、かの「蒸る粟のごとし」といへる」（八オ）をふまへて、内侍と云そへたる此句の作意なり。

月になけ同じくは今ほと、きす

これは、「月になけ同じ雲井の時鳥」といふを取て、同敷は今といへる此句のはたらき也。

月見れはちゞに物こそ悲しけれ我身ひとつの秋にはあらねと

といふをとりて、

詠むればちゞに物思ふ月にまた我身ひとつのみねの秋かぜ

長明

これは、彼千里の「我身ひとつの秋にはあらねど」といへるにあたりて、その「詠こし月にまたわが身ひ」（八ウ）とつの秋也」とこたへ侍る也。これら贈答の格なり。

また、法橋兼載の句、

まつ人にたちえや霞む宿の梅　『新つくば』

これは、彼「我宿の梅の立えや見えつらん思ひの外に君が来ませる」といふを取て、待人のこぬは我宿の梅の立えや、其人の為に霞みつらんと人と梅とを恨み、心を打かへして仕立給へり。此うちかへしていへるにて、心あたらしく成侍也。かやうなるもひとつの格なり。

又、声をかり、余のものに云たて、或は秀句をかぬるも有。」（九オ）

治るや神祇霊地の四方の春

また愚句にも、

なむといつは味奇妙也菊の酒

此類も「ちぎりけん」の格と同心也。又、一字をたがえすして用るも有。これも其所によりて用やう、心を各別にして用る也。『伊勢物語』に融の大臣の「しのぶもぢすり」の歌を女の返歌に用たる、此心也。『左伝』などにも詩を賦すと云て、古詩を用たる例有。ある人の物がたりに、

桜を見て、

いにしへの奈良のみや此八重桜

此句は誹言なきやうに聞ゆ。され」（九ウ）ども、よくは云まはしたり。右、本歌本語を取用る格也。され共、これのみにて限るまじき事なり。大かた此理を以て、古人の句をおほく見れば、心は自然にしる、也。

定家卿詞云、「和歌無師匠。惟以旧歌為師。染於心古風、習詞於先達者、誰人不詠之哉。」

○第三　発句本意之事

秀句をいかほどよく云おほせたりといへども、其本意たがひたるはきらひ侍也。

かへるさは思ひきられぬ藤見哉

藤みといへる秀句は、人を棄市する」（十オ）わざに藤身といへるもの有て、刃もやすらかにたゝすきられぬをいへるにや。庭にもせよ山にもせよ屠所云たてたるもいかゞにや、是のみもかぎらず。

めぐりくる年も羊のあゆみ哉

まめがなでかくは七歩のし筆哉

両句共に其故事をあなぐる時は、不吉の例也。聯句などにも、

華乗止黄蝶といふ対に

藤綱繋黒牛

此対字は能対し侍れ共、やさしき黄蝶にむくつけき黒牛つゞなきあはさん事、風情おもはし」（十ウ）からず。かやう例もあまた有、またさのみほむまじき花を事々敷めづるもまた本意ちがひ侍る也。まして愛するものをさもしくいひくたさんをや。

あなゆかし鼠のふんの花ざかり

いづれの花もめづる歌人の心なれ共、やぶ椿の花、さのみゆかしかるべき花とも見えず。もし又、

あなむさし鼠のふんの花の枝

とせば花への悪口なるべし。とかく発句は人の聞なれぬ題聞にくし。此比の発句帳ともを見れば、草やら木やらん、聞なれぬ草木の」（十一オ）異名の句共見えたり。またき、にくき格有。

衣川にたつや弁慶が柳なた

此下の秀句、柳かとおもへは長刀のやうにも聞え、長刀かとおもへば「や」の字かみに付て、風情おもはしからず。此ゆきやうの句作、新敷とて専にする初心有。点をかけ、あまさへ集にいる、撰者有。おかしき事の最上なり。聞にくさに上手はもてはやさぬゆへ、古き集にも見えぬを、めづらしき事かと思ひてするなるべし。また、

接足で花の枝をるやさくらかけ」（十一ウ）

此句も同じやうに聞にくき中にも、そのおらるゝ花とふまえておる器と混乱して、いづれか何れともわけもなく侍る也。古き句の批判に、

雲やこけら風のしらぐる月がんな

此句も、しらぐるうつはものはつきがんな、しらげらるゝ物は月也。しらぐるものとしらけらるゝもの、ひとつなりてわけなきよし、最なる批判也。又、此比の時鳥の発句共を見れば、上より「ほとゝぎ」と云つめ。とまりの五文字のはじめに。「す」と云出せる事おほく有。おもはしからぬ風情也。」（十二オ）

千金の声はほとゝぎす白哉

此句、疝気とのしう句は勿論叶侍れ共、よく吟ずる程、時鳥が寸白になりたるにや。また題を取侍らは「寄二寸白一時鳥」とやいふべからん、いと聞にくし。また、

谷ぞこになくやほとゝき数千丈

一声にやむはほとゝぎすけもなし

同じやうに聞侍れ共、此両句は「寸白」とは雲泥のちがひ有。此間にあさからぬ心こもり侍る也。誹諧のみにも限らす、かんなの文章にも此心有也。ある人の物語に面白対とて、

弘誓のふねの舟歌牛頭馬頭の」（十二ウ）馬かたふし

『傍人難』ニ云、弘誓の舟の舟歌も、もとなき事といへ共、上をまくら言葉にして、はいかい体にをゐて、尤おもしろし。「牛頭馬頭の馬かたぶし」、一向不レ謂。「馬かたふし」は、馬ををふもの歌也。しかるを「牛頭馬頭の馬かたぶし」といへるは、馬がわれとうたふにや。但また、此鬼は冥途にて馬ををふ鬼にや。彼『毛吹草』時代の「はとゝぎす」などいへる。五音相通の発句共を正式・正章の非言の書に「へたとぎす」と難じ、追たてられしよりいづかたへ鳴て行つらん」（十三オ）「よどゝきす」も、それより後の集には希也。『郡山』『ひむろ森』の両書は、この道けいこせるもの一覧して俗難をのかれずは有べからざる書也。いかさまにも時鳥の句は仕がたきものにや。

○第四　無心所着の発句之事

無心所着といへるは、和歌よりも難ぜる事也。其有様、心を着る所なしとて一首にしかとしたる体なき也。『八雲御抄』ニ云、たゞ、そゞろごとなり。あしくよめばそのすがたともなきものなり。

わきも子かひたひにおふるすぐろくのことひのうしのくらのうへのかさ」（十三ウ）

はいかいにもかゝる句のみ多し。

花はねにかへるの声やさきはしり

足引の山さるや月のかつらの木

これらの句いひかけのみに心を入て、何をいへるとも聞えず。一句も立す、まして平句などには数をもしらぬ程あれども、前句にまぎれて一句立やうなれは、誰も気を付ず。此頃は殊ニ、発句帳共多く板行有。其集共を見るに発句の部立をもしられぬと見えたり。其故は冬の衣がへの句をも夏の更衣の部に入、元日の此句を花の所に入たるも有。おもふに、これは「花の春」と云詞を見誤て撰者句の」（十四オ）心をもしられぬなるべし。まして、散花・咲花・つぼむ花の句のならべやうも次第なきのみなり。また、発句帳に切字をもしかと知ぬやうなる口つきして、百句二百句いりたる人、あまた有。これは、世にはいかいの名をとるべき為にや、いと不審なり。若名をしらるべき為ならは、一句二句にてもよろしく、本意たゞしき句をせらるべし。代々の撰集にも、名歌一首二首入て後世に名を残したるためし多し。此道建立の為なれは、其句をあけて一々巨細に批判したき物なれど、句を指時は、」（十四ウ）例の非言の書のやうになるゆへ、まづあらかたの格をあげ侍る。類を以て推給ふべし。すべて、其身其徳にも至すして、みだりに発句帳つくる人多し。其撰者の心には、代々の和歌の撰者とひとしきやうにもおもはるへけれど、退て見る時は、下心さもしく侍る歟。

又、此比の撰集に、貞徳翁句なりとて悪句おほく見え侍る。大かたは、貞徳への手向草也といへり。若又、実に貞徳句也とも、撰集といへるからは、よろしからざる句は入らるまじき事也。愚推をめぐらし」（十五オ）侍に、貞徳は名高き人なれは、此集には貞徳の句もあまた有と、初心におもはせて、其発句帳の面目にせらるゝと見えたり。貞徳名人たりといふ共、云出さるゝ句毎に名句もあるまじき事なり。又、人の発句望める時、我もおもはしからずは、知ながら其座の興までに云出す事も有事なるを、それを貞徳の句とだにいへば、吟味もなくて集に入らるゝを、初心のともがら、貞徳の句にもかゝる句有とて手本にする、せんかたなき事共也。貞徳心あらば草のかげ」（十五ウ）にて、いかばかりかなしまれん。孔子・老子・釈迦などの詞は云出さるゝ毎に、皆金言也。それは世を同じうしてかたる事にもあらず。貞徳の事はいへるも愚、唯今定家卿の幽霊也と名のりて云出るとも、其名に迷ては悦ぶまじ。また、三歳の童子なりとも、其詞のよろしきには心服し侍らんとおもふもまた我心也。

○第五　歌の制の詞之事　はいかいも

歌の読かたに制の詞といへる事有。これは、古人の云出したる事を一句にてもとらぬをしへ也。其故は古人此詞に粉骨したる詞也。」（十六オ）

月やあらぬ　春やむかし　霞かねたる

ほの〳〵とあかしのうら

なといへる言詞也。かやうの歌を集めたる制の言とて一冊有。あるが中にも家隆の歌おほし。されとも、此一冊には限るべからず。近代の歌なりとも、作者のふかく思入たる詞はとらぬかよき也。また、幾度にてもよめる詞有。

久かたの月　をしてるや難波

あし引の山時鳥の類これなり

同じ古人の歌ながら「足引の山鳥」はまくら詞也。それゆへ幾度読てもくるしからず。「ほの〳〵とあかし」の」（十六ウ）歌は人丸ふかく思入めづらしき景気をつらねし故也。かやうの詞を主有詞といへり。

此心、誹諧にも有。

霞を　衣にたとへ

夕立を　太刀に取なをし
色葉を　いろはに云ならひ
霜を　柱にけづりなす類

千度、百度、云出るとも。新敷一言をだに加へば、人の句を盗めるともいはれず。等類とも難じがたし。又、主ある詞を発句にとる事は申に不及。平句にもせまじき事也。主ある詞とは、

稀に逢夜はまん丸にねもせいて」（十七オ）　貞徳
玉子のおやがいそく衣々
ま虫のさたはおかしませとよ
見るもにくへの字戴ヨ入道　季吟
いかさまに盗ならん下心
かきそこなへる恋の字

かやうの類あけてかそふへからず。何は何に似たると見たて、それはそれなるかと取なし、景気を詠め、感を催し、謎の心を云めぐらし、文字の上につきて仕立なと、際限もなき事なれは、句を引例をあぐるに及はす。

○第六　きゝ発句之事

やみの夜は松原ばかり月夜哉」（十七ウ）
涼風は川はた斗あつさ哉　一重
五月雨は山路斗や水ひたし

右、やみの夜は松ばら斗にて残る世界は皆月夜也と、松原のしげりたると月の光の明なるとを云たてたる也。残二句も此心を以て聞は明也。其外、

かいで見よ何の香もなし梅の花
此花にがきくらぶれは万花香なしと也。
しら鷺の巣だちの後はからす哉

巣がからになると也。

二人行ひとりはぬれぬしぐれ哉

二人ながらぬるゝといふ心也、と古来聞来れり。更に今一説有。」（十八オ）はいかいのみにもかきらす唐にも、

飛鳥顥不動

とぶ鳥の影は動す、其とふ鳥の実の姿か動けは影は随ふと也。

鶏有二三足一　卵有毛

鶏の見えたる所の足は二つにて、其ゆかんと思ふ心の足共には三つ也。玉子かへりて後、くろき鳥の子はくろく、しろき鳥の子は白くなれは、かいこの内よりも毛有となり。禅家の学者の心を勘弁する語なとにあまた有事也。かやうの事より工夫仕習ても、従浅入深の道理なれば、真の道にも以たると也。」（十八ウ）

○第七　詞をのこす発句の事

千代も見ん丁固か夢を春の門

この心は、丁固ゆめに腹の上に松生たりと見たりしを怪み、人に語ければ、松は十八公とかくなれば、十八年の後、公の位にのほり給ふべしと円せしかば、後、其ことくありし。其故事を以て千代もへんと云。春の門といへるにて松といふ事を言すして、言外にあらはしたり。

星祭る香の煙や蚤のいき　季吟

これは、世話に「のみのいき天へのぼる」といふを以て、七夕まつる香の煙も」（十九オ）天にのぼるといふ事を云まはしたる也。彼在中将の、「我身ひとつはもとの身にして」と云はなちて、二条の后はましまさぬといふ事を言外にもたせたると、事こそかはれ、大

かた心通ひ侍る也。

右二句の類、初心のならぬ句体也。すへて宗匠とあかめ、師と頼み侍るにも、目きゝ有べき事也。年ばかりよりて、我は誰が口伝をうけ、我は誰が門弟なりと、我師を鼻にあてゝ、自慢せらるれと、常の句の仕立やう・付はだへなとしらざる人はうけられ侍らす。我さへ」（十九ウ）不堪にて人を堪能にするといふ道理、努々有べからず。たま〳〵爰やかしこの懐帋を見るにも、つけはだへの味、一句の賓主の差別あるは、まれなるかと覚えたり。賓主の事も次にしるし侍るべし。たとへば、「松の雪」といふ時は、「松」は主にて「雪」賓也。客也。又、「宿の秋」、「秋の宿」などいふも此心持也。前句の肌によりて味有事也。つらにくき事いふとおぼしめし候はんづれ共、此書を御覧して五年十年合点ゆかぬ事をも、一いろ二いろにても得心せられし方々も」（二十オ）有へし。されとも、人の心すなをならねは、一品二品の理をも初て知れし人、其得たる所の悦は忘て、我利口発明のやうにもてなし、あるは、むかしより心得たる顔ぶりにて、かへつてとり〳〵にあざけられん初心もあるへけれど、我はもとより我一人の為にせず、なべての為なれは、其義をもかへり見す、あらかたの事は書あらはし侍る。猶、委事はしばらく口伝にのこし侍る。

○第八　切字之事

発句には、まづ切字と云物なく」（二十ウ）ては叶はぬ也。猶、其子細有。

哉・所願・がもな「もがな」と同じ心也。「も」は休め字。

がな同

けり・ぞ・や・か・つ・き・を事は次にしるす。

しむかふ「し」はきれ字。過去の「し」は切にならす。

ぬ「をはんぬ」はきれ字。「不のぬ」にてはきれす。

いく・いづら・いつこ・いづれ・いかで・とれ・どち・何

かやうのうたがひの詞いつれも切字也。

いさ・たれ・たり・めり・けれ・けり・なり

かやうに「り」ととまりたる詞

もなし・はなし・こそ・らし・らん

此外にも、あまた侍れど、大かた此心持也。

また、下知の詞の類

花にくめ・月になけ・ちらせ・ふくな

なといへる詞、きりもなし。

右の切字　哉・もがな・はなし・もなし」（二十一オ）

なとの外、大かたとまりにはせぬ、可也。

なりとまり・けりとまり、なと

又、上に下知して下に「哉」ととめ、上に「こそ」と云て、下に「哉」

となる事、宗匠わさ也。仕立やう心持有。

○第九　をまはしの発句之事

花さかぬ草木もあるを石の竹

どんぐりの木さへもあるを利根草

この仕立やうは上に「さへ」といひて、下に「を」と抑侍る也。句の心は、花さかぬ草木さへあるを、この石の竹の花さくは奇妙也と、石や竹には花さかぬものなるを、といふ心に仕たてたる也。もの二つをくらべいへるにて心自然に切る也。」（二十一ウ）「を」の字を切字の所に出し侍れば、常の「てにをは」の「を」の字にても切字になるかとおもひあやまり、又、古人の二の句のとまりに「を」の字

をすへたるを見て、切字かと思ふ人有故に、これもひとつの口伝にて侍れ共、爰にしるし侍る也。たとへは、

白雲と花さく木々をみねの景

かやうなるは、切字にてはなく侍る。又、ものふたつくらべずしても切る有。こゝに一両句あげ侍る。其格は口伝のこし侍る。

霜にたえしみさほもあるを雪の松　　美州住

をしかりし春さへあるを年の暮　　愚句」（二十二オ）

また、祖白の句に、

暁かた雨はれたる元日に

来る春はさはらぬ物をよるの雨

此句は彼「くる春は八重むぐらにもさはらざりけり」といへるを下心に持て、雨の暁はれたるを云めぐらし侍るにや。其隠者の身の程をおもへば一入珍重なるにや。これらや、をまはしの発句の手本なるへし。

○第十　三だん切発句之事

花はひも柳は髪をときつ風

織女はだての薄ぎり雲の帯　　則常

○第十一　はね字どめ発句之事」（二十二ウ）

名ぞ高き月や桂を折つらん

歌もなし花やめいぼくなかるらん　　季吟

○第十二　大まはしの発句之事

あなたふと春日のみがく玉つ島

花さかぬ身ははく斗犬ざくら　　元隣

右三色の発句、甚深の口伝ある事にて、其道の堪能ならずしては、たとひ仕立やうしるといへども、つかうまつらざる事、道の法なり。やつかれ一句仕しも僭踰の罪のがるゝに所なけれと、とてもせし事なれば書付侍し。

宗養より伝受の書に云、

永享年中北野万句　　御所様御句」（二十三オ）

みづかきのふりて久しく松の雪

と、あそばし候を、梵灯庵主宗匠にて、是は「久しき」と御沙汰候は、珍重の御句たるへきを、大廻無二御存知一ゆへ、と申されしをきこしめし、しからば引なをしてこそ侍らめと、御機色あしかりければ、都の住居かなはずしてするがのかたはらと侍しと也。其外、二字切・三字切なといへる発句の仕立やう有事也。また、恋の発句に心持有事也。

○第十三　脇の句の事

まづ、脇は発句に随て時節た」（二十三ウ）がひなきやうに打そひ、付たるよし。其上、月・雪・宿、或は、草木・鳥・獣の名なと、又、「比」といふ字にてとむる、つねの事也。「涼しさ」「長閑さ」なととむる事も自然に有。世俗にもいへるやうに、発句は客人、脇は亭主、第三は相伴人なれば、まつ亭主脇は、客人発句の御意にそむかぬやうにと心得たる、よき也。時節をたがえぬ、一つの法也。時節をたがえぬとは、同じ春にても三ケ月にわかち、一月のうちにても、上

旬・中旬・下旬と分ち侍る。同じ時節と」（二十四オ）いひながら、霞などのやうに春三月に渡るもの有。されど、霞にもうすき・こき、時節の景気あり。忠峰の「いふばかりにやみよしの、山もかすみて」とよまれしは、元日の霞也。此「いふばかり」といへるに、深き心有事也。元日の句・立秋の句など、一日にかきる時節也。同し上旬のうちなから、元日の句に白馬の節会のうはさも、脇に時節ちがひ也。立秋の句に七夕の道具付たるも、其心なり。此心持肝要なり。其故に取なし、かつてせぬ事也。詩の法に起承転合とて」（二十四ウ）一の句にて心を起し、二の句にて其心を承、三の句にて転じ、末の句にて惣の心を合する事有、発句・脇・第三も起承転の心に来る、能候。第三はもとより相伴人にたとへ侍れは、かけはなれたる、よく侍る。其故に取なしも仕候。紹巴法橋より玄仍へつかはされたる書に、脇に五つの法有。

一　相対、二　打添、三　違附、
四　心付、五　比留

本歌・本語、或世話などに本づき仕立たる句の脇は、大かた其発句に云のこしたる詞を取て仕也。」（二十五オ）猶、其発句によりてその云のこさぬ言葉をとらぬ事有。いさゝか口伝。又、大小の脇などいへる事有。貞徳老よりの口伝なり。

○第十四　第三の句の事

まつ、第三は、「てとめ」「らんとめ」、なべての事也。其様子によりて、「に」とも「もなし」ともとむる也。貞徳の第三に、

春の末天下に名ある時鳥

と、とめられたる事有。かやうのとめやう、百匂誹諧にはなき事也。「に」ととめ「もなし」ととむる事、勿論習ある事なれは、師伝」（二十五ウ）なき人はえせぬ事と云なから、又、其習を得れば別の事もなき事也。かやうの曲は常にせぬ事也。たゝ、「てとめ」「らんどめ」の第三に、たけ高く、景気うつり、思ひ入ふかく第三めきて聞ゆるにあさからぬ口伝も工夫もある事也。惣して物の上手は、さしたる事もなき事をつゐでおもしろくし出し侍る也。此こと諸芸の上に渡り侍へし。不審におほしめす人々は、なににても一かたの名人に御たづねあるべし。

梅の花みにこそきつれ雪をはきて　可全」（二十六オ）
御所車花にくる〳〵みす巻て　梅信
にくや風花と知てそ吹ぬらん　昌珎
後々も見よとや古歌を集らん　正慶

大かたかやうの風情なるへし。前句を聞ざれ共おもしろし。第三のみにかぎらす、前句なしに面白き、上品の句也。中品の句までは、前句の光りにてよく聞えて、前句なしにはさもなきなり。それさへ有を、前句をかり前句にもたれんは、作者の無念歟。されども前句にもたるゝ句を聞知人も稀也。前句にもたれぬやうにと、年ころ心かくれ共甚成かたし。」（二十六ウ）

○第十五　四句目之事

脇の句のおもぶりとは、一くらゐかはりて、いかにもかろく仕立たるよし。其故に、「てにをは」にて、「たる」「なり」「めり」など、留る由、紹巴の口伝書には侍れども、また、文字にて、「路」「雪」「雲」などと、とまりたるも有なり。たゞ、かるく付たる、よきと云心なるべし。連歌には面連歌とて、かるきを専にし侍れ共、はいかいには、たゝかろきばかりにてなまづきなるはおもしろげなき也。能可心得。

○第十六　五句目之事（二十七オ）

是も、たけ高く第三のおもかけに仕立たる能也。されとも、左様にばかりはなりがたき故、たけたかからぬ句も仕る事ニ候。すべて上の句の「てとめ」「らんとめ」の句は、第三をつかうまつる心にて仕たるよし。

○第十七　面八句之事　付九句目

おもて八句之事、大かたの法度、貞徳の十首の歌を以て類をゝし給ふべし。其ひとつに、

誹諧は式目（シキモク）そなき大かたは和漢（ワカン）のごとく去きらふべし

和漢には季（キ）恋（コヒ）述懐（シュツクワイ）旅同字（ジ）連歌のごとくしかるべき哉」（二十七ウ）但、「打」といふ字のやうなる「てには」字は、いづれも三句ざりなり。

誹諧は右五色ををしなべて七句をは五句五句は三句に

名所国神祇釈教恋無常述懐々旧おもてにぞせぬ

水辺やまた山類の体用は連歌のごとく用ゆへき也

私に云、連歌には水辺・山類ともに、体用々とか、用体体とは三句つゞき、用体用・体用体とはさみてはせす。しかれとも、貞徳晩年には、体用のわかちなく、三句つゝけてせられし也。此ゆへ、貞徳流をくむものは今体用をわかたす。猶其座の宗匠次第なるへし。

鬼女とらおほかみの千句もの面にもすれと一座一句に

新式の一座一句は二句すへし」（二十八オ）二句の物をは三句有へし

三句ある物は四句有四句のものおもてをかへて五つあるへし

私云、かく四句のものは五つとゆるし来れとも、四本の花を五句する事はなし。此心を以て余はなそらへしるへし。

新式にうらと面をきらふものはいかいにては七句さるへし

連歌にはせぬ物の名や古事詞けやけきものは一座一句にやつかれそのかみ九句目に、恋の句をつかうまつり侍れは、或人難曰、連歌には十句目まて、恋無常等の句にはゞかり有。いかに誹諧は法度ゆるきとて、九句より恋などせん」（二十八ウ）事いかが、と申されしを、予こたへ侍しは、其あやぶみなからしめん為に、古人法をたてをかれたり。これにかぎらず、季は連歌には七句去を誹諧には五句去なるをも、連の事思ひ出て、七句さらば連誹の替めなしと理り侍し。かやうの遠慮ずきたる事、田舎説（イナカセツ）とて、連歌よりもまゝ有事に聞及候。いまも田舎にはしかとしたる宗匠なき故、云がちのやうに、さま〳〵のいりほがなる事有。また、京の宗匠たちはあまり物やはらかにて、打こしの心、吟味なきがち也。入（イレ）あはし侍らは」（二十九オ）都鄙（トヒ）ともに上手出来侍べし。

○第十八　月花之句の事

月はおもての七句目まで、二の折よりは十三句目までに仕、花は裏の十三句目を定座といへり。されとも、脇・第三にも花をもいたすなり。うらの月ははやく出したる、可也。月ををそく出せは、花の句につかへてわるし。又、花の句に月を結てする事有。これを月花の句といふ。月は四季ともに有ゆへに、花にひかれて春也。月花の句、一座に二句はなし。また、花紅葉とつゝきては雑なり。また、ふるき連歌ニ、」（二十九ウ）

花の後青葉なりしが紅葉して

といふやうなる句は、三季の事をいへとも句は秋也。また、花の句におもはしからぬ有。たとへは、

障子（シャウジ）のそとにもるゝ人声

あつまりて双六を打花の春

身を粉になして棒つかふ也
渡る世やそば切をうつ花の春

かやうの句、他流の懐帋に見え侍る。上にいへる事、「花の春」にも能相応せりとも見えず。前句には、上にいへる事ばかりにて能付也。しからば、「花の春」付あまりたるとやいはん。また、「花の春」を、言葉の」（三十オ）たらぬ所のたしにしたるやうにて聞にくし。花の句は、其「花」といふ字なくては、其一句聞え難やうなるよし。花をやとひたるやうなるは、花の本意にあらす。また、花〝もし・花さまよく〳〵よき句にあらざれは、道外もの也。惣じて、月花ともに時宜ある事にて、発句したるもの三人以上の連衆にては、花はせぬ事也。月の句にも辞義あるといへ共、花の句の大切なるごとくにはあらす。十三句目を花定座と古来よりさため来れる事も、句毎に我人花の句を」（三十ウ）はゞかりて十三句目までのばしたるを、又十四句めに下の句にせんもいかゝとて、十三句にせし事也とや。其故に、独吟か其座の宗匠なれば、いづかたにても辞義なしにする事也。若また、余人も珍重なる句ある時は、宗匠・貴人に理てする事也。宗匠よりもよき花の前句とおもへる時は、ゆるしてたれにも付させる事也。とにもかくにも、花の句をよからしめん為也。されども、今は十三句目花の定座ときはまり侍れは、それより此方には大かた仕ぬよし。若き衆の」（三十一オ）くせとて、これにかきらす伝受の「てにをは」、または、とめやうの曲なと、一色、二いろ習ては、立にも居にもそれのみせらるゝ也。すべて習の有事は、つねにはせぬものゝ由候。月の句もたとへは、「月にしのべる」「月にまつ」「月に書を見る」なといへるは、さも有ぬへし。季をもたせん為斗に、「月に何する」「月にかをする」などいへるやうなる月に縁なき事は聞にくし。

○第十九　呼出花・引上花之事

よひ出し花は、大かたはせぬ事也。うらの六句めより以後に春の句」（三十一ウ）出せは、花よひ出しになる也。其故、うらの六句目以後春をせぬ、よき也。春は三句せすしてはかなはぬ事なれは、六・七・八句と来て九句めより十二句めまて四句なれは、定座の花の句五句去の春一句近きゆへ也。されども、貴人・高家六句め以後に、春をせられたるとき、あしきともいひがたし。其時、雑の花、他の季の花をする也。雑の花とは、「花紅葉」「花聟」の類、他の季の花とは、「余花」また、「花の後青葉なりしが紅葉して」なといへる句也。されども、春の花だに仕かたきに、」（三十二オ）雑の花、他の季の人にさせんもいかゞなれば、遠慮する事也。九句めより以後に高きうへものせず。十句めより後はひくき植物もせぬ事也。引上花とは、十三句めよりこなたに、前句春にてもなきに花の句をする事也。うらにても五句めまてには、春をも仕候。其故は三句続ても定座の花と五句の隔有故也。又、いつくにても春一句来るには、花の句をつけ、二句三句来て後、花の句はせぬといへる、田舎説也。不可信用。「はなやか」といふ言葉、「さく」「にほふ」「薫」」（三十二ウ）なと結ばすしては、正花にならず。これは、「栄」の字を「はなやか」と読故也、と貞徳の説なり。「花やか」、句によりて正花にも成也。しからは、植物に二句なり。

○第二十　句数之事　并去嫌

五句去
春秋之句　三句ヨリ五句マテつゞく。二句ニテハすてず。

同

夏冬之句　二句ヨリ三句マテ。平句にては、一句にても不レ苦。

三句去

神祇之句　一句にてもくるしからず。三句より多くはせす。

同

釈教之句　同前。

同

述懐・無常　一句にてもくるしからず。引合ては三句もする也。

無常ばかりも三句はつゝかず。述懐ばかりも三句はつゞかず。懐旧といふ事、述懐と同し分にして用る也。また、述懐・無常・述懐なと、はさみては悪。

同

恋之句　二句より五句まて一句にては不捨。恋の字は折をきらふ也。」（三十三オ）

三句去

居所　一句にても不苦。三句までつゞく。其中にも住居や「家の風」なと、よはきものは二句去也。寺・宮は居所にあらす。

同

山類　同前。体用之事、前ニしるす。

同

水辺　同前。

二句去

人倫　二句もつゝく。主君の「君」は非二人倫一。恋の「君」は人倫なり。氏・官名、人倫にあらず。

「塗師」は人倫也。「ぬしや」とすれは、人倫をのかるゝ也。此格を以て、かやう類はをしてしるへし。

如来・菩薩并二祖師の名、非二人倫一。僧之聖、賢之名、孔子顔回をはしめ、皆人倫也。其わかちは、仏家には人倫をのかれ、家を出るを本意とせり。儒者は人倫たるをつねの道とする故也。さるによりて、「いもほり小僧」なといへるは人倫也。名僧といふは非二人倫一也、といふ古人の説なり。

三句去

旅之句　三句よりおほくはせす。一句にても不苦。旅之字は一座に三つ。

三句去

生類　かはりたる物も二句より多くはせす。鳥ト鳥、虫ト虫、魚ト魚、獣ト獣。」（三十三ウ）

但、二句去モ有

同　鳥や虫とのやうに替たる事也。

三句去

植物　かはりたるも二句より多くは不レ続。木と木、草と草。

又、二句サリ

同　木と草とのやうにかはり、また、竹なとゝかはりたる事也。

三句去

衣類　二句よりおをくはつゝかす。衣といふ字は五句去也。衣川なといへるは三句去。袖ト袖、三句去也。

二句去

名所　二句よりおほくはつゞかす。

三句去

夜分　三句までもする也。一句にてもくるしからす。「夜あけ」も夜分。また、「夜の明て」としても夜分也。「明はなれ」とすれは朝時分也。「けふの月」「けふの今宵」非夜分。大かた、「けふ」といふ字そへは、夜分にあらす。

三句去

時分　夕時分・朝時分也事也。朝の時分と暮の時分とは打越嫌。

二句去

降物　二句よりおほくはつゝかす。雪・雨・露なとかはりたる事也。

同

聳物　同。但、霧はふりもの・聳物、両方也。

器財　同しやうなる器もの三句はつゝかす。此さりきらひやうはしなくゝ、むつかしき事有。其座の宗匠にとはるへし。」（三十四オ）

○第廿一　糸遊・霞・長閑ト云句の事

「糸ゆふ」とは、春の日かげの空にちら〳〵して目にさえぎるをいふ也。詩に、野馬・陽炎・遊糸なと作れるも、此事とぞ。しかるを、今、

最優長にたるゝつり針

なといへる句を、「いとゆふ」に声似たればとて春の季に用事誤也。「かすむる」と云詞、掠の字なれば打まかせて春にはなり難。肖柏句ニ、「いく重物いひかすむ覧」かやうのあいしらひなくては、季に成かたき由、貞徳説也。「目のかすむ」「鐘の霞」なとは、霞の字なれば春也。」（三十四ウ）長閑と云句の事、勿論春也。乍去、近年、春の季につまりて長閑にもあるまじき事を、「長閑」といふ字を無理に云そへ春になし、殊ニ三つ物のはいかいなとに、諸道具を「茶磨長閑にて」の、「硯長閑にて」の、「かぢ屋の家居長閑て」など、あらぬものまでをのどかがる作者多し。下手の連歌師のまねか聞にくし。勿論、ふるき草子の言葉などに、ゆふなる心にのどかと書たる所有とも、それは味のちがひたるもの也。か様の事、所詮人のしたるは笑すして、我はせぬ、よきなるべし。」（三十五オ）

あたら敷舟の帆柱長閑て
客人をまつ膳立は長閑にて
罪人を鬼や長閑にせめぬらん

かやうの長閑、世にたくさん也。或、水・山・野・原なとの景。又は、人の心の上、月・日の光なとの外、いな物の長閑聞にくし。

○第廿二　春秋ノ両字添季持句ノ事

たとへは、「春の夕くれ」「秋の中空」なと云つけたるは云に不及。「春のつき山」「秋の泉水」なと、是は「春山」「秋水」と云へる文字も有。其上、山も水も春秋にしたがひて景気もかはるものなれば、くるしかるまじき事也。また、「春の台」、かやうの詞聞なれず。つまりたる」（三十五ウ）やうなれども、「春台」といふ字あれはくるしかるまじきか。詩の題に、「春女ノ恨」といへるありといへども、「春の女」一向にいはるまじ。詩の題の心は、女は陰気をつかさとる故、春の陽気に感じて恋慕の心も起れると云心也。また、

おもひ切つゝ世をそむく秋

かやうの句も、秋といふ字、ふと出たるやうなれ共、四季のうちにも秋は物思ふ事一しほまさる時なれば、聞にくからす。唐にも此心有。同じ事ながら、「世をそむく夏」・「世をそむく冬」など、聞にくし。春秋の」（三十六オ）両字は大かた、悦しき方には春、憂しき方には秋といふ、相応也。さはいへと、めてたき事に「千秋」ともいへり。しかるを春といふ字にあづからぬ事を、季につまりて、

大事をならふ春の兵法
山崎出てあぶらうる春

などつまりて聞え侍る也。問て云、しからは『紅梅千句』に貞徳の句に、

初瀬より出て勧進の春

といふ句もあしきにや。答て云、此句はおもはしからす。貞徳は此道の名人にして、其才たかき事、猶樊会がたゝかひに長ぜるが」（三十六ウ）ごとし。しかれども、かやうの句おほくの中に見る事、樊会が兵つきてにげたる事有がごとし。しかるを、今此貞徳の句をおもひつまりたる春といふ句せん事、兵を事とせるものゝ、にげながら、樊会がにげたるためしを引て、辱とせざるがごとし。これに限らす、『紅梅千句』、つまりたる句・一句の落着せぬ句おほし。其悪を捨て、よき所ばかりにせ給ふへし。

○第廿三　つゝどまりの事

上の句の「つゝとまり」もむかしは有し事といへ共、今はなき事也。」（三十七オ）下の句の「つゝどまり」よくとまると留り兼ると、ふた品あり。

とをるきせるにたばこつきつゝ
くらき座敷に火をともしつゝ

かやうの「つゝ」ばとまり侍らす。また、とまる「つゝ」有。

いのちのかきり思ひわひつゝ
きえし跡から雪は降つゝ

同じ『百人一首』のうちながら、

ふじの高ねに雪はふりつゝ
我衣手は露にぬれつゝ

といふに軽重有。「つゝとめ」のよくこまかに聞ゆる子細侍れど、人ひとの工夫の為に引て発ず。」（三十七ウ）

やつかれも千句のうちに、
両夫は見じと尼に成つゝ

○第廿四　にとまりの事　并にてとまり

上の句の「にとまり」、別にをさへ字なといふ事もなし。とまらぬ句、大かた、過去の「し」文字上に有てはとまらず。それも句体によるべし。かやう事、限もなき事なれは、逐一しるすにいとまあらず。余は準てしるべし。

むら〳〵とおりゐし雀立跡に

下の句の「にとまり」、習ある事なれは、習得ぬ間はせぬがよき也。「まに〳〵」といふ「にとまり」、嫌ずと」（三十八オ）古来より云来れり。

私云、これは、彼「紅葉の錦神の随意」とかくゆへに、きらはす。たとへは、「盗は番のねふるまに〳〵」などいへる、あいだ〳〵の心あるはきらふ也。

「にとまり」に「たに」といふ詞嫌すと古来よりいへり。

私云、「たに」は「さへ」といふ心なる故なるべし。かくいへと折あひには、いかゝ。しからは、唯・さへ・だもなと云かへてしかるへし。

「にてとまり」の上にをく字

を・は・も・からぬ・には

此外、「さへ」といふ字もをさへ字也。猶、此外に心持有。別帋述之。「にとまり」「にてとまり」共一句去。下の句の「てとめ」「みゆとめ」習有事なれは、普通にはせぬ事也。」（三十八ウ）

○第廿五　てにをはの雑詞

▲上に「こそ」と云ては、下に「れ」と留也。また、「人こそ見えね秋はきにけり」、これは「見えね」と「ね」の字にてをさえたる故、「り」と留れり。惣じて、「え・け・せ・て・ね」の横通みな、「こそ」といふ字ノ押字也。此外に「こそ」といふ字のつかひやう、あまたあり。是より下にしるす「てにをは」何れも一応ばかりなり。堪能の人、此面にかはりたる事せられたりとも。初心は難ぜすして、それに随て審にとひ、其奥義を極め給へし。

▲上に「ぞ」と云ては、下に「る」と留侍る。」（三十九オ）

▲上にうたがひの「や」文字ありて、下に「て」とも「し」とも決したる詞にては、とまり侍らす。

▲心の立帰る「てには」あり。「亦不説乎」などいへる類、よろこばしからずや。中々よろこばしき、といふ心也。

▲「らし」と「らん」と「けらし」、皆二句去。

▲「けらし」と「けらし」、七句去也。三字仮名故也。とまりには三嫌折。

▲「てん」「なん」「せん」など、かはりたるはね字とまりには二句去なり。とまりならねは、付ても不苦也。もとより、折あひをきらふ也。

▲「とらん」「おらん」などのはね詞、「ら」の」（三十九ウ）字は、上の字に付たる字ゆへ、一字はね也、といふ説あれとも、また、「覧」の字にも通ひて聞ゆる故、是も「らん」の二字はねと同前に嫌たる、よき也。

▲「らるゝ」「ざらん」「ならし」「ぬらし」「つらし」かやうの三仮名皆七句去。連歌には面を嫌也。留りには、一座二三。

▲「けり」「けらし」「けき」等の「け」文字、皆二句去也。「けりとまり」五有。

▲「るゝ」と云詞、二句去。「しくるゝ」「日のくるゝ」などの類也。

▲「る留り」二句去。「帰れる」「通える」なと。

▲「るらん」二句去也。「残らん」「帰るらん」など。」（四十オ）「るらん」は、三字かんなとは替て見渡しにもくるしからす。「残る」「帰る」の「る」文字は、其字に付て二句去の「らんとまりふり」「るらんとまり」と云事はなき事也。

▲「不のぬ」、「をはんぬ」、といふは、たとへは、

「百人一首」の中にも

「ほさぬ袖だに」「知るもしらぬも」

なとといふ類、「不のぬ」也。

「八十島かけてこぎ出ぬ」「秋きぬと」

なと「をはんぬ」の「ぬ」也。

▲夏の夜はねぬに明ぬ　上ハ「不のぬ」下ハ「をはんぬ」

雪まだ消ぬ春の山かげ　［「不のぬ」「をはんぬ」］

「をはんぬ」は二句去也。

▲「不のぬ」と「ぬ」。但、「不のぬ」は大切なる」（四十ウ）の間打越までは不可嫌之由、新式に被定。今は付句斗を嫌也。「不のぬ」と「をはんぬ」とは更に不嫌。乍去、前句の留に、「うき世の事は聞はてぬ」とあるに、付句の腰、「おもひもよらぬ」なとあるは、折あひ聞にくき故に、付ぬ事に成れり。新式に大切といふ詞は稀なるといふ義にはあらす。いくらもいはで叶はぬ文字なれば、重宝なるといふ事也。

▲「する」といふ詞に「せん」と云句、二句去。「する」と〳〵、「せん」と〳〵と二句去也。

▲「ず」と〳〵、二句去。「しらず」「聞す」の類」（四十一オ）

▲右二いろも大切なる故二句去也。

▲「さる」に「不のぬ」付句も不嫌。

▲「せざる」「行ざる」の類。

▲「あらさる」に「有」の字二句去。

▲「也」と「や」、「なる」と「なる」、「なれ」と「なれ」、皆二句去也。

▲「なり」といふに二あり　一つには「なりけり」。是は「也」の字也。又、一には「なりにけり」。是は「成」の字なり。此「成」の字は三句去也。「也」の字は、文字たゝしくあれとも、上に体なければはいはれぬ付字なれは、「てにをは」なる故に、「也」と〳〵は、先にいふかことく二句ざりなり。たとへは、春也、秋なりと申す類也。されは、文字かはる故に「也」の字の「なり」、「成」の字「なり」とは、一切きらはす。能聞分て去嫌へし。

「成になれ」「なれやなる」「ならし」「ならん」等、「な」の一字こそおなじけれ。したの付字かはりたる詞なれは、」（四十一ウ）皆付句ばかりを嫌也。

▲「なれや」「ならし」「ならん」三つかなれは、面を嫌、誹には七句去なり。句のとまりには一座に二句あり。誹には三句有。

▲「ならん」に二あり。たとへは、「雨ならん」といふはてにをは也。

「雨とならん」といふは「成」の字也。

▲「なりにけり」一座に二有。誹には三有へし。とまりにはたけをかへ二有へし。右、六ケ条『御傘』の文。

▲「らん」と下にはぬるには、上に「や」「か」「いづれ」「なに」「たれ」なといへる、うたかふ心の字有てはぬる事、常の」（四十二オ）習也。「なん」「せん」「けん」なとの一字ばねには、をさへ字の沙汰なし。又、上にうたがひの字なくて「らん」とはぬる事有。

久かたの光のどけき春の日にしつ心なく花のちるらん

これは、うたがひの字上になけれと、かゝる長閑なる春の日に、何とてしづかなる心なく花は散ぞ、と心にとがめていへり。此「てにをは」数多有。『いせものがたり』に、

逢事は玉のをばかりおもほえてつらき心の長くみゆらん

右、一応の「てにをは」也。猶、ふかき」（四十二ウ）さかひに至りては、「こそ」「らん」等字は申すに不及。「の」、字にさへ有文無文の習有事にて、漢家のをき字の法も通せる心有とそ。

○第廿六　故事用やうの事

連歌には古事をこのめるを「物知連歌」とて嫌侍れど、定家卿などよみ給へる歌にも、また紹巴などせられし連歌にも、古歌をとり、草子の詞を用ひ、古語をやはらけ、経文などの心をたどり給へる、数をしらず。また、用ひつけたる故事はくるしからず。聞なれぬ古事はいかゝ、といふ説有。此聞」（四十三オ）なれぬといふに、ふたつの品あり。文盲なる宗匠の耳には、世に知わたりたる『大学』の中にある文字も、聞なれぬ成へし。連歌の事はしらす、誹諧にをゐては、『源氏』『さ衣』『伊勢物語』等、『万葉集』「八代集」、『つれ〳〵草』『まくらさうし』、漢家の書にも「五経」「六経」『史記』『左伝』「荘老之篇」『文選』『白氏文集』、仏書にも『法華経』『碧岩』、此外、世間流布の書にある事、聞なれすとは云がたかるへし。また、我しらぬ古事付る人有時、よくしりたるかほぶりして、おもしろがる宗匠」（四十三ウ）世に多し。かくいへるとて、連誹の宗匠件の書共を見すしらぬを曲事といふにはあらず。これはたゝ、をのれがせはきをかざりて、人のひろきをそしり、しらぬをよく知たるかほにもてなす人の為にいへり。其しらぬにいたりては、よく故事来歴をとひきはめ、其上に宗匠やくには句作・付はたへ、吟味せらるへし。これ、しらずなからもしれるの道にして、かねてはまた弟子の迷を解の法なるへし。能叶たる故事を用ゆるには、別に習も工夫もなき事也。たとへは、」（四十四オ）

ふかきうぢ川舟で渡さん

といへる句に、佐、木いけづきに乗て先陣せられし故事をもつても、よく肌のあへる付やう有。また、

さすからかさは夕立のため

といふ句に、秦始皇の御狩のとき松の大木となりて雨をもらさざりし故事も句作にて能付也。

廿余年まつりごちしも時移
半分かたる仙境のゆめ

前句は敦盛の謡に「平家世を取て廿余年」と云詞を取て平家の故事也。しかるを、二十余年政せしといふにたよりて彼邯鄲の」（四十四ウ）十年の夢を思ひ出て半分と切用候。此句にまた、

約束の夕にばかり雨となり

これはまた、楚王の巫山にて神女と契り給ひしかねごとに、朝には雲となり暮には雨と成て君にまみえん、とちかひしを思出、半分かたるといふにあたり、「暮にばかり雨となり」とあいしらひ侍。『無言抄』云、本歌の事、三句に渡るべからす。本説・物語同之、但、

にげ歌あらは不レ苦。たとへは、

月に心やひかれ行らん

といふ句に、」（四十五オ）

足なみもなづめる駒の秋の夜に

と付てまた、

岩ふみくれぬあふさかの関

といふは、前句「あふ坂の関の清水にかげ見えていまや引らん望月の駒」。後は、「あふさかの関の岩かどふみならし山立出るきりはらの駒」といふ歌にて付る也。此心をはいかいにも、

をさむる国の様子かたれる

札の徳ひろし六十万人に

異香群集よ教なす場

初は「遊行柳」後は「誓願寺」の謡也。

○第廿七　親句疎句之事」（四十五ウ）

親句は詞を対し、或は道具を以て付。疎句といふは、心を用て付るをいふ也。発句も其通也。親句といへるはたとへば、

梅に鶯　柳に鞠　極楽ニ地獄

虎の尾と云に　龍の髯

なと付る義也。世話に道具付と云。疎句といふに至りては定まりたる付物もなし。何にても心の上を以付る也。世に心付といふ、これ也。

見めぐらしけり四方の山々

物おもひまきれやすると宿を出て

またしと思ふくれは幾度

身の程を恋しきうちにかへり見て」（四十六オ）

其故に親句は初心仕て、初心も聞侍る也。疎句は名人のみして、名人のみ能聞也。かくいへるとて、親句は名人はせぬといふにはあらす。たとへは、七五三を以て人をふるまひて、一旦の公義を調る、親句の体也。糟糠を以て、まめやかなる友をまねきてうらなくかたらへる、疎句の体也。若また、七五三を以て心実の友と語らんは、鬼に鉄棒也。されはにや、親疎かぬる句を秀逸とはいへり。此疎句の体、宗匠わざなりといへる事、僻心得に思ひ、其まねをして仕そこなへる事、いと見ぐるし。世話にも」（四十六ウ）疎句のわるきは犬もくはぬ、と云へり。其仕そこなひの発句一つふたつ記し侍る。余は、推而可知。

目出度やとにも目出度御代の春

春や春花や花なる花のはる

名月や一天四海雲もなし

かやうの句して、初心にひけらかし、いかさまにも功者わざかと心にくがらせる人多し。彼禅家に、「六々元来三十六鷺白烏黒」など、たゝちに云はなせると同じ事のやうに作者はおもふべけれど、誠に似たる事は似たれども、是なる事は是ならぬなるべし。」（四十七オ）古人の仕たる疎句

月の秋花の春たつ朝かな　宗祇

花さきて心に残る春もなし　御製

また、此ごろの句に、

思ひなしか晴れど霞むけさの空

○第廿八　篇序題曲流　并用付・後付之事

此五つの品、和歌の体より沙汰有事也。まづ、篇序題の三つは大あらめなる義也、曲流はつぶさにこまかなる義也。歌にも篇序題

曲流とあながち五句次第せるにはあらず。もとより、上の句に篇序題の心有て、下の句曲流なるも有。下の句篇序題にて、上の句曲流」（四十七ウ）なるも有。一句に篇序題の心有て、四句曲流なるも有。まづ其次第にかなひたる、しるし侍る。

春過て　篇　夏来にけらし　序　白妙の　題
衣ほすてふ　曲　あまのかく山　流

また、一句篇序題にて四句曲流なるも有。慈円の歌に

うき世哉よしの、花に春のかぜしぐるゝ空に有明のつき

これ「うき世哉」といへるを四句にて云のへたり。連諧にていはく、

今はとて心ぼそくも立わかれ
さすがにおもひたえぬ玉の緒
三井さして落てこそゆけ」（四十八オ）

物ぐるひ腰には扇目になみだ

連誹にては、篇序題曲流の句をするといへる事はなし。とかく我句を篇序題の心になしたる、よき也。我句を曲流にすれは用付に成てわるし。此外、二道・四道なといへる事侍り。

用付といへる事は、初心のまゝ有事にて、中心以後にはかつてなき事なり。たとへは、

「傘」といふに、「骨」「髄」「油」なと付、道具の用付也。「指」「張」など付、心の用付也。また、後付といへるは、

「仏」といふに「石」、「香需」と云ニ「長刀」」（四十八ウ）なと付る事也。引合て「石仏」「長刀」「香需」となれば、「石」も「長刀」も名字にて、虚になり、実は「仏」と「香需」なる故也。右二いろは名字上に付たり。また、名字下につくも有。「観世音」「菩薩」なとの類なり。「鑓」に「梅」、「桜」に「鯛」付るよし。

また、「酒」に「奈良」・「奈良」に「酒」、「茶」に「宇治」・「々々」（宇治）に「茶」、どちを付てもくるしからず。皆、体なる故也。これらは、まのあたりなる事なる故に少心あるものはせず。其こまかなるに至ては却者も仕誤事也。

○第廿九　前句に持れ前句を借句之事」（四十九オ）

梅桜等の名木に花と付る事、花は定まりたる名なければ、前句の花をいへるやうなれば、前句を借心也。たとへは、

下さるゝ鷹の鳥毛やあらふらん
義式有げになをすまな板

さなから前句の鳥をのするやうにて聞にくし、また、

望みし戒をうくる氏寺
済米と知行の初穂参らせて

此「まいらせて」といふにて前句の「氏寺」へ参らするやうにて聞にくし。同じ事なから、

済米と知行の初穂取分て」（四十九ウ）

といふにて一句立也。また、

月かけに馬観音とあらはれて

「と」の字にて何か観音とあらはれたるにや。一句立かたし。これを

月かけに馬観音のあらはれて

といへば、一句立なり。また、

名木の柳に秋の東風吹きて
ゆふへの露もちらす宮前

此「ちらす」といふにて、前句の「風」をいふやうなり。同じ事なから、

ゆふべの露もちれる宮前

「ちれる」にて、風をからすして、露我とちる也。大かた、此はたへ也。右三句は初心の為なれは、あるか中」（五十オ）にも耳近き事をしる

し侍也。猶、こまかき所にいたりては毫厘をあらそふ差別有。

○第卅　異形通体之事　并四手付

法の心を鳥もなくなり
駒にかふ草の枯葉に鳴おりて
あなものすごや野おくりの体
いかにせん鼠狼あばれ出て

「あな」に「鼠」、「物すごき野おくり」に「狼」付たり。これ四手ぐみとて、古来よりきらへる体は、其きらふ故は、「鼠」「狼」とのつゝき、対せさる物を無理につゝけたる故也。同事なから、

いかにせん狼きつねあはれ出て」（五十ウ）

たとひ四手くみにても、つゞきさへよければくるしからす。それをきらへは付物もなきやうに成也。

柿うちわをも両の手に得し
信濃路や唐にも知音訪ぬらん

さながら四手にて聞にくし

目すひ鼻すひ口をこそ吸
杉ゆきの鯛は頭に味ありて

これは、くゝりて付たる物也。是を目にも鼻にも口にも付れば、こせくりてわるし。こせらずに聞ゆる句あらはこまかに分て付てもくるしかるまじ。乍去、取分て付れは句こせるもの也。」（五十一オ）

古来よりの抄物に、

花と花とは色をあらそふ
川岸に藤山吹のさき乱れ

此付やうわるしといへり。

峰の松ひとり春をや送るらん

松の句取のきてよろし。また、

春夏秋に風かはるなり
花の後青葉なりしが紅葉して

と周阿被付しを、又、救済法師、

雪の時さていかならん峰の松

此後の句共、古来より賞美し来れり。され共、前の「藤山吹」の句も周阿の句も、あしきにはあるべからず。後の句にくらふれば、」（五十一ウ）をとりたるといふ事也。それをわきまえずして、ひたすら悪きと心得て半分つくる流あり。また、前句に有事をみなえあいしらはすしてのぬけ句に四手付はきらふ故に、其中にての眼ばかり付たりと云のふる人有。そのかみ、ある人の前句に、「めねこ」といふ事出たるに、人々猫ばかりに付侍れは、貞徳其句をもどして、「め」の字にうときとて、「比丘尼の御所」といふ事を付て、「め」の字をもすてす付られたりとかや。我門弟の興行に、」（五十二オ）

菩提の為にまいる寺々

といふ前句有しに、人々の句に「寺」といふ字のあいしらひ有なから、「寺〳〵」といふ「寺」ふたつのあいしらひなしといへりしかは、人々其前句を予にゆづられしかば、

浅きよりふかき法ぞと数珠切て

また、

金衣鳥をそ朝な〳〵きく
おき〳〵や必むすふ谷の水

此句も鶯を朝きくといへるには、たやすく付侍りしか共、「朝な〳〵聞」といふ朝毎にあいしらひ求兼侍て後、必といふ字を得たり。」（五十二ウ）連誹のみにも限らす、禅学なとにもこれに似たることあり。かの神秀との頌に、

身是菩提樹心如明鏡台
時々勤払拭勿使惹塵埃

また、六祖恵能

菩提本無樹明鏡亦非台
本来無一物何処惹塵埃

二人の頌をくらぶる時は、後の六祖の頌はるかにまさりたり。其故を以て、五祖も、まつ六祖恵能に衣鉢をつたへ給ふを聞て、神秀の頌はひたすらわるきと皆人おもへり。さにはあらず。六」（五十三オ）祖の頌に引くらぶる時はをとれり。是、儒の方よりいはく、「利仁、安仁。」といふのへだてなり。されども、初学のためには神秀の頌よし。恵能の頌は見解高過て、無一偏に落る事有。今の連歌付やうも、初心は初め二句の親句の付様をよく覚て、以後かの疎句の体を学ばるべし。

○第卅一　六義之事

六義は詩歌の命にして此道にたどれる人、あきらかにせずは、あるべからす。しかあれども、世にしる人まれなり。貴人・高家の」（五十三ウ）上は我まじはらぬ所なれば、猶はかりがたし。いてや、誹諧を以て世になる人の中に、あるは一端の習をうけ、あるは古人の抄物を写しなとして、柱ににかはせるものは、詩をいへは和歌連諧うとく、和歌連誹をいへば詩にうとし。まづ、六義といへるは、『古今』の「序」に、

そも〳〵歌のさまむつなり、からの歌にもかくぞあるべき。むくさのひとつには、そへうた。おほさざきの御門をそへ奉る歌、

なにはつに咲や此花冬ごもり今は春べとさくや此花」（五十四オ）

ふたつには、かぞへうた、

咲花に思ひつくみのあぢきなさ身にいたづきのいるも知ずて

みつには、なずらへ歌、

君にけさ朝の霜のおきていなば恋しきごとに消や渡らん

よつには、たとへうた、

我恋はよむともつきしありそ海の浜のまさこはよみつくすとも

いつゝには、たゞこと歌、

いつはりのなき世なりせはいかはかり人の言葉のうれしからまし

むつには、いはひ歌、

このとのはむへも冨けりさき草の」（五十四ウ）みつばよつばにとのつくりせり

と、いへるなるへし。

「小注」ニ云

おほよそ、むくさにわかれん事はえあるましき事になん。右の「小注」につきても、貫之の筆なりといへる説も有。また、後人の書加へつるなと、家々の説々有。此次に『古今』の「序」の六義の事も云出、多くものすれど、ひとつは世の憚をおもひ、つたなき身のほとをかへり見、又は道の奥義をかろ〴〵敷いへるも、其道のおきてにそむける事なれば、いさゝか連誹の句をあげて、かたのごとく理り侍るもの也。」（五十五オ）

風　そへ歌也。ふるき連歌に、

人の子のをひさき祝て

つぼむより色香もふかし宿の梅

季吟に云かけゝる

よめならはみとりにせはや柳髪

これらやかなふべからん

貞徳

すへて、風の体は詩歌連誹共に、小序・詞書・前書なくては聞えかたき事なるへし。

賦　かすへうた

いづれぞと見れは手おらん花もなし
さびしさや鹿のみならす猿の声　康吉

といへるなるへし。

比　なそらへうた」（五十五ウ）

あつまへ下ける人の馬のはなむけし侍るに、『新つくは集』

春風に行人したふ柳かな　宗砌

黒谷にて

花の帽子かつけ梢のあま蛙　元隣母

興　たとへうた　又即興

冬川の雪の柳や瀧の糸
猿猴か露の月取わらびの手　季吟

同　花盛おもへは似たる雲もなし
月ばかり昔のなりやしかの郷　専順　一如

雅　たゝことうた

咲は散理しらぬ花もがな
ま、候よ年ひとつよるも花の春　季吟

頌　いはひうた」（五十六オ）

照そめし世や久かたの秋の月
君が代やみもすそ川のすまんざい

此六義のひろき事、詩歌連歌のみにもかぎらず、いやしき民の云出る言葉の末も、生としいける物の声も、此六くさをいづる事なし。其ゆへに此分ちしらざる人の句も、しれるかたより見たらましかば、其ひとかたにはあらずといふ事あらさるべし。されども、そのすべしらぬ我等が為にいはく、柱をはめる虫のたま〳〵文字のかたちにあとつけ侍れども、其虫はいづれの文字ともしらずして、しる人の」（五十六ウ）為にのみしらるゝと、いづれかいつれならん。猶、十体なといへる事有。

○追加　書物題号之事

すべて、書物に外題付候事、和漢共にさま〴〵の古法、とり〴〵の作意あなるといへと、つゝめて是をいふ時は、其しなをほきにあらざるべし。まづ、『源氏物語』の例に

▲其草子の中にある詞をとる。

「桐つほ」の巻　詞云

御つほねはきりつほ也

▲歌をとる。

「はゝ木々」の巻

はゝきゞの心をしらてそのはらや道にあやなくまどひぬる哉」（五十七オ）

▲歌と詞とをとる。

「夕貝」の巻　詞

しろくさけるをなん夕貝と申侍る

心あてにそれかとぞ見る白露のひかりそへたる夕がほの花

▲歌にも詞にもよらぬは「夢の浮橋」ノ巻。

此四色を、古き抄物には、天台の「有門」「空門」「亦有亦空門」「非有非空門」の四諦の法門になぞらへたり。

▲此外、其発端の語を取て名とす。

『つれ〴〵草』・『老子』ノ「道可道」の類

▲又、作者の名を題号とせるも有。

『孟子』『荘子』『白氏文集』なと。

又、礼（レイ）の事をしるせは、『礼記（ライキ）』といひ、『灸経（クウキャウ）』『馬書（ハショ）』なとの類なるべし。」（五十七ウ）

又、『阿弥陀経』『薬師経』などは、其仏の徳をいへれば其名に付侍。

▲又、『妙法蓮華経』『観世音』

これは人（ニン）・法（ハウ）・喩（ユ）の三を兼たり。人（ニン）は観音、法は妙法、喩は蓮華也。

其外、心を以て付る事は、あけてかそふへからす。この品々の格を以て作意をめくらし付給ふべし。」（五十八オ）

まれ人のとふ、誹諧は何事そ。曰、誹諧は和歌のひとかたにて、天地をうこかし、男女の中をもやはらくる道也。まれ人の曰、さはいへれと、此はいかいにたくみなるも、さして世に功もなく、身に益もなきはなんそや。曰、これ、道のとかにあらす。人の科也。それ、百薬は病をのそき、命長からしむるそなへなり。しかるを、あためける医用て人をあやまらんに、くすりのわさと云て可ならんや。其妙なるにいたりては、疱丁か牛を解すら、生をやしなひ、世を治る理有。いかんそ。まのあたりを見てしらぬさかひをはか」（五十八ウ）らんや。すへて才芸道徳の分ち有。蝸牛の角をふり、そのわさを以てなり。富るにへつらひ、身をたて、活計の媒とせる。才也。芸也。むくらの宿に代々の聖賢を師とし、友とし、待事なくあかしくらし、内仏礼に心にかなひ、外仁義の用をなす。道也。徳也。万のわさ才とせる事は、かたきにてやすし。道とせる事は、やすきに似てかたしといへり。また問。此小式は何の為にしるせる。曰、やつかれ千の句をつらねしも、今見れ（ママ）、ところ〳〵心よろしからさる事のみ有。かつはみつからの」（五十九オ）不忘のそなへにかきならへ侍し。また曰、しからは、はこのうちにおさめて可ならん。なんすれそ、あつさにちりはめ侍るや。曰、わか誤のくやしきにこるゝ事のうきをしらは、いかんそ、人々にしらして、後の車のいましめとせさらん。また曰、国の利器は、人にしめすへからすといへる事有。此『小式』のむねを以て、予か数の句をなしり出んは、いかゝはせん。曰、わらはさらんにはしかし。されと、おろものか事、たれ有てかひきあけて云出んよしそしり侍」（五十九ウ）らんは、我一人の恥なるなるへし。もし此心をたとりて、初心のともから句をみかき得んは、道の為也。名またしたかふといへる事もなきにしもあらされは、もる（ママ）くるおしともいへ。ときに寛文二年初春　日述之。

洛下六角通

山岡元隣（又号玄水）

終」（六十オ）

【索引】

1、要語索引

[あ行]

敦盛 26
阿弥陀経 32
家隆 15
伊勢物語 13、26
　融の大臣 13
一如 31
一重 16
永享年中北野万句 18
恵能 30

[か行]

学者 16
可全 19
観世音 28、32
邯鄲 26
季吟 11、12、16、18、30、31
灸経 32
救済 29
弘誓 14
口伝 17、18、19
毛吹草 14
兼載 13
源氏物語 26、31
「桐つほ」の巻 31
「は、木々」の巻 31
「夕顔」の巻 31
「夢の浮橋」の巻 31
元隣 10、18、31、32
　愚句 13、18
　やつかれ 12、18、20、24、32
　やつかれ千の句 32
　やつかれも千句 24
　予 10、20、29、32
　元隣母 31
　孔子 15、22
　紅梅千句 23
　郡山 12、14
　五経 26
　古今集 11
　古今の序 30
　御傘 26
　故事 11、13、16、26
　古人 13、15、17、20、22、27、30

[さ行]

西武 11
狭衣物語 26
佐、木いけづきに乗て先陣せられし故事 26
左伝 13、26
在中将 31
詩 13、19、23、30、31
師 10、11、12、13、17、19
宗砌 31
宗長 11
宗養 18
荘老之篇 26
楚王 26
祖白 18
慈円 28
史記 11
重頼 15
釈迦 29
周阿 32
昌珎 19
紹巴 26
肖柏 23
抄物 24
初心 30
神秀 26
新撰菟玖波集 11
秦始皇 26
誓願寺 27
世話 27
撰集 15
専順 31
禅学 29
禅家 27
宗鑑 11
宗祇 27
荘子 31

[た行]

大学 26
千里 13
長明 13
菟玖波集 24
貫之 30
徒然草 26、31
定家 13、15、26
貞徳 11、15、16、19、20
貞徳の十首の歌 20、21、22、26、27
天台 31
「有門」 31
「空門」 31
「非有非空門」 31
「亦有亦空門」 31

[な行]

則常 12、18

［は行］

俳諧　10、11、12、14、15、19
はいかい　10、11、12、14、15、15
句　10、11、12、13、14、15
16、19、20、23、27、32
16、17、18、19、20、21
22、23、24、25、26、27
28、29、30、31、32
俳言　13
梅信　19
馬鹿集　12
白氏文集　26、31
馬書　32
八代集　26

樊会　23
非言の書　11、14、15
人丸　15
氷室守　12
百人一首　24、25
傍人難　14
美州住　18
平家物語　26
碧岩　26
法華経　26
発句帳　14、15

［ま行］

枕草子　26
正章　11、12、14
正式　12、14

正慶　19
万葉集　26
御狩のとき松の大木となりて雨を
もらさざりし故事　26
妙法蓮華経　32
無言抄　26
孟子　31
守武　11
文選　26
門弟　11、17、29

［や行］

薬師経　32
八雲御抄　14
康吉　31
遊行柳　27

［ら行］

礼記　32
六経　26
立圃　11
連歌　11、12、19、20、23
25、26、30、31
15、31
「道可道」　31

［わ行］

和歌（歌）　10、11、12、13、14
15、18、19、20、23、25
26、27、28、30、31、32

2、引用歌句索引

［あ］

逢事は玉のをばかりおもほえてつらき心の長くみゆらん　26
秋きぬと　29
浅きよりふかき法ぞと数珠切て　25
足なみもなづめる駒の秋の夜に　14
あし引の山時鳥　29
足引の山さるや月のかつらの木　14
足引の山鳥　18
あたら敷舟の帆柱長閑て　20
あつまりて双六を打花の春　20
あなたふと春日のみがく玉つ島　16
あなむさし鼠のふんの花の枝　29
あなものすごや野おくりの体　27
あなゆかし鼠のふんの花ざかり　23

［い］

いかさまに盗ならん下心　31
いかにせん鼠狼あばれ出て　23
異香群集よ教なす場　27
いく重物いひかすむ覧　29
いづれぞと見れは手おらん花もなし　31

いつはりのなき世なりせはいかはかり人の言葉のうれしからまし　30
最優長にたるゝつり針　23
いにしへの奈良のみや此八重桜　13
いのちのかきり思ひわひつゝ　24
今はとて心ぼそくも立わかれ　28
岩ふみくれぬあふさかの関　27

[う]

うき世哉よしのゝ花に春のかぜしぐるゝ空に有明のつき　28
歌もなし花やめいぼくなかるらん　18
梅の花みにこそきつれ雪をはきて　19

[え]

猿猴か露の月取わらびの手　31

[お]

あふさかの関の岩かどふみならし山立出るきりはらの駒　27
あふ坂の関の清水にかげ見えていまや引らん望月の駒　27
おき〳〵や必むすふ谷の水　29
をさむる国の様子かたれる　27
治るや神祇霊地の四方の春　13
をしかりし春さへあるを年の暮　18
をしてるや難波　15
鬼女とらおほかみの千句もの面にもすれと一座一句に　20
をみなへしたとはゞあはの内侍哉　12
おもひ切つゝ世をそむく秋　23
思ひなしか晴れど霞むけさの空　27
思へども人めづゝみの高けれは川と見つゝもえこそ渡らね　12
織女はだての薄ぎり雲の帯　18

[か]

かいで見よ何の香もなし梅の花　16
柿うちわをも両の手に得し　29
かきそこなへる恋の字　16
霞かねたる　15
川岸に藤山吹のさき乱れ　29

[き]

きえし跡から雪は降つゝ　24
義式有げになをすまな板　28
君が代やみもすそ川のすまんざい　31
君にけさ朝の霜のおきていなば恋しきごとに消や渡らん　30
客人をまつ膳立は長閑にて　23
金衣鳥をそ朝な〳〵きく　29

[く]

下さるゝ鷹の鳥毛やあらふらん　28
雲やこけら風のしらぐる月がんな　14
くらき座敷に火をともしつゝ　24
来る春はさはらぬ物をよるの雨　18
くる春は八重むぐらにもさはらざりけり　18

[こ]

（古今序）そも〳〵歌のさまむつなりからの歌にも…　30
心あてにそれかとぞ見る白露のひかりそへたる夕がほの花　31
このとのはむへも冨けりさき草のみつばよつばにとのつくりせり　30
駒にかふ草の枯葉に鳴おりて　29
これらやかなふべからん　30
衣川にたつや弁慶が柳なた　14
御所車花にくる〳〵みす巻て　19

［さ］

罪人を鬼や長閑にせめぬらん　23
咲は散理しらぬ花もがな　31
咲花に思ひつくみのあちきなさ身にいたづきのいるも知ずて　30
さすからかさは夕立のため　26
さすがにおもひたえぬ玉の緒　28
さびしさや鹿のみならす猿の声　31
五月雨のふるの中道しりぬれは川と見つゝも猶渡りける　12
五月雨は山路斗や水ひたし　16
三句ある物は四句有四句のものおもてをかへて五つあるへし　20

［し］

信濃路や唐にも知音訪ぬらん　29
「しのぶもぢすり」の歌　13
霜にたえしみさほもあるを雪の松　18
春女ノ恨　23
障子のそとにもるゝ人声　20
白雲と花さく木々をみねの景　18
しら鷺の巣だちの後はからす哉　16
知るもしらぬも　25
新式にうらと面をきらふものはいかいにては七句さるへし　20
新式の一座一句は二句すへし二句の物をは三句有へし　20

［す］

水辺やまた山類の体用は連歌のごとく用ゆへき也　20
杉ゆきの鯛は頭に味ありて　29
寄二寸白一時鳥　14

［せ］

千金の声はほとゝぎす寸白哉　14

［た］

大事をならふ春の兵法　23
谷ぞこになくやほとゝき数千丈　14
玉子のおやかいそく衣々　16

［ち］

契りけん心ぞつらき織女の年にひとたひ逢はあふかは　12
ちきりけん心ぞつらき餅つくし　12
ちぎりけん　13
千代も見ん丁固か夢を春の門　16

［つ］

接足で花の枝をるやさくらかけ　14
月かけに馬観音とあらはれて　28
月かけに馬観音のあらはれて　28
月に心やひかれ行らん　27
月になけ同じくは今ほとゝきす　13
月になけ同じ雲井の時鳥　13
月の秋花の春たつ朝かな　27
月ばかり昔のなりやしかの郷　31
月見れはちゞに物こそ悲しけれ我身ひとつの秋にはあらねと　13
月やあらぬ春やむかし　15
つぼむより色香もふかし宿の梅　30

［て］

照そめし世や久かたの秋の月　31

［と］

とをるきせるにたばこつきつゝ　24
時々勤払拭勿レ使レ惹二塵埃一　30
済米と知行の初穂参らせて　28

済米と知行の初穂取分て　28
どんぐりの木さへもあるを利根草　17

[な]

詠むればちゞに物思ふ月にまた我身ひとつのみねの秋かぜ　13
詠こし月にまたわが身ひとつの秋也　13
名ぞ高き月や桂を折つらん　18
なにはつに咲や此花冬ごもり今は春べとさくや此花　30
なむといつは味奇妙也菊の酒　13

[に]

にくや風花と知てそ吹ぬらん　19
廿余年まつりごちしも時移　26
鶏有二三足一　卵有レ毛　16

[の]

望みし戒をうくる氏寺　28
後々も見よとや古歌を集らん　19
のみのいき天へのぼる　16
法の心を鳥もなくなり　29

[は]

誹諧は式目そなき大かたは和漢のごとく去きらふべし　20
誹諧は右五色ををしなべて七句をは五句五句は三句に　23
初瀬より出て勧進の春　13
華乗止二黄蝶一　17
花さかぬ草木もあるを石の竹　18
花さかぬ身ははく斗犬ざくら　27
花さきて心に残る春もなし　31
花盛おもへは似たる雲もなし　29
花と花とは色をあらそ　29
花の後青葉なりしが紅葉して　28
花の帽子かつけ梢のあま蛙　17
花はねにかへるの声やさきはしり　14
花はひも柳は髪をときつ風　13
春風に行人したふ柳かな　13
春過て夏来にけらし白妙の衣ほすてふあまのかく山　18
春夏秋に風かはるなり　30
春の末天下に名ある時鳥　13
春や春花や花なる花のはる　19
半分かたる仙境のゆめ　27

[ひ]

久かたの月　26
久かたの光のどけき春の日にしつ心なく花のちるらん　15
飛鳥顥不レ動　26
一声にやむはほとゝぎすけもなし　16
人の子のをひさき祝て　14
[ふ]
ふかきうぢ川舟で渡さん　30
藤綱繋二黒牛一　26
ふじの高ねに雪はふりつゝ　13
二人行ひとりはぬれぬしぐれ哉　24
札の徳ひろし六十万人に　16
冬川の雪の柳や瀧の糸　27
[ほ]
ほさぬ袖だに　31
星祭る香の煙や蚤のいき　25
ほの〳〵とあかしのうら　16

本来無一一物何処惹一塵埃一　30
菩提の為にまいる寺々　29
菩提本無レ樹明レ鏡亦非レ台　30

[ま]

またしと思ふくれは幾度　27
まつ人にたちえや霞む宿の梅　13
ま、候よ年ひとつよるも花の春　31
ま虫のさたはおかしませとよ　16
まめがなでかくは七歩のし筆哉　13
稀に逢夜はまん丸にねもせいて　16

[み]

三井（寺）さして落てこそゆけ　28
みづかきのふりて久しく松の雪　18
峰の松ひとり春をや送るらん　29
身の程を恋しきうちにかへり見て　27
身是菩提樹心如一明鏡台一　30
見めぐらしけり四方の山々　27
見るもにくへの字戴ヨ入道　16
身を粉になして棒つかふ也　21

[む]

蒸る粟のごとし　13

[め]

名月や一天四海雲もなし　27
名所国神祇釈教恋無常述懐々旧おもてにぞせぬ　20
名木の柳に秋の東風吹きて　28
めぐりくる年も羊のあゆみ哉　13
目すひ鼻すひ口をこそ吸　29
目出度やとにも目出度御代の春　27

[も]

物おもひまきれやすると宿を出て　27
物ぐるひ腰には扇目になみだ　28

[や行]

約束の夕にばかり雨となり　26
八十島かけてこぎ出ぬ　25
山崎出てあぶらうる春　23
やみの夜は松原ばかり月夜哉　16
やみの夜は松ばら斗　16
ゆふへの露もちらす宮前　28
ゆふべの露もちれる宮前　28
雪の時さていかならん峰の松　29
よめならはみとりにせはや柳髪　30

[ら行]

両夫は見じと尼に成つ、　24
連歌にはせぬ物の名や古事詞けやけきものは一座一句に　20
六々元来三十六鷺白烏黒　27

[わ]

和漢には季恋述懐旅同字連歌のごとくしかるべき哉　20
我恋はよむともつきしありそ海の浜のまさこはよみつくすとも　30
我衣手は露にぬれつ、　24
我身ひとつの秋にはあらねど　13
我身ひとつはもとの身にして　16
我宿の梅の立えや見えつらん思ひの外に君が来ませる　13
わきも子かひたひにおふるすぐろくのことひのうしのくらのうへのかさ　14
渡る世やそば切をうつ花の春　21